ギルド『ハレルヤ』の経理係

湊美耶子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ギルド『ハレルヤ』の経理係

【Ｎコード】
Ｎ２４１６Ｒ

【作者名】
湊美耶子

【あらすじ】
交通事故で死に掛けの私イトウワカバがなんだか知らない間に異世界トリップ。イイ人オーラだしまくるギルドマスター（ただしイケメン）とギルドの職員さん達とまったり第２の人生楽しみます！
（気にする方のためにＲ１５と残酷描写設定つけたしました。なお、ＢＬ・中二病・萌えネタが不快な方は１章は大変不快な出来です。ただし、２章以降は恐らく欠片も出てきません。）

登場人物紹介【ネタバレ有】（前書き）

作中のネタバレ有に付き要注意。
増えたら増やすよ的な。

登場人物紹介【ネタバレ有】

【伊藤　雅葉】いとう　わかば　１７歳　高２
主人公、長い黒髪を後ろに三つ編みにしてまとめている、趣味が勉強の真面目な女子高生。
自身の容姿には大して興味が無いキレイ系の美少女。
通学途中に交通事故で重傷を負ったが何故か異世界で目覚める。
トリップ後保護されて、名字が保護者の保護者（？）である紅堂（くどう）に変更。
一言：「おぉ、勉強になるなぁ！」

【太刀花　快世】たちばな　かいぜ　２７歳　ギルドマスター
雅葉の保護者、見た目は金髪碧眼の優男。
器用貧乏で全てがそれなりの成果を出すが、周囲に優秀すぎる人物が多すぎてヘタレに。
雅葉のトリップ先、ブエルノ帝国にある有名ギルドのマスター（要は社長）。
実家の庭先で倒れていた雅葉を保護する。
一言：「最近胃が痛い気がする……」

【紅堂　翼】くどう　つばさ　？歳　太刀花家当主の妻
保護者の保護者、っつか快世の実母。雅葉を気に入り身分登録のために養子縁組する。
※夫婦別姓の国なので名字が太刀花ではない。
最近の趣味は養女の着せ替え。
末っ子快世の結婚をニヨニヨしながら見守るも最近はヤキモキに変わっていった。
一言：「快世、早く求婚しなさい！」

【太刀花　花道】たちばな　はなみち　６０歳　太刀花家当主
雅葉の保護者の夫　元ブエルノ帝国の将軍様。愛妻家。
今作では正直影が薄いというか出番無し。
一言：「妻が活き活きしているな、と……」

【太刀花　晴緋】たちばな　はるひ　３９歳　銀行員
雅葉の保護者の兄　太刀花家最強（凶）の実力者。愛妻家。
花道に同じく今作では正直影が薄いというか出番無し。
一言：「設定が素敵ですねと言われます……♪」

【太刀花　青空】たちばな　あそら　３３歳　近衛団長　太刀花家次期当主
雅葉の保護者の兄　愛妻家。
普段は皇城で生活してるので正直影が薄いというか出番無し。
一言：「無害なら構わんが、太刀花家に何かあったら消すぞ？」

【御堂　香優】みどう　こうゆう　２４歳　貴族・快世の婚約者
保護者快世の婚約者兼副ギルドマスター、赤髪の見た目ゴージャス美女でツンデレ属性。
バリツという体術が得意な貴族のお嬢様、何故そんなに強くなったかは謎。
一言：「変なこと相談してないで仕事しなさい！」

【ハヤサカ　タクミ】　３０歳　平民・既婚者（平民なので貴字表記なし）
副ギルドマスター、爽やか系イケメン。
当時の人気受付嬢をいつの間にかに落として結婚していた器用な人。
一言：「いや、快世が不器用なだけじゃね？」

【ハン　ワン】　？歳　平民

事務部主任、水色の髪した才女系お姉さま。
雅葉を指導する直属の上司、頼れるみんなの姉御。意外にノリがよい。
一言：「経理は地味よ、でも大事なのよ？」

【キムラ　トウファ】【キムラ　イファ】　１８歳くらい　平民
ハレルヤの看板双子受付嬢。見た目は茶髪のふわゆる萌えっ子たち。
姉トウファが語尾延ばしの毒舌、妹イファがドジっ子。
ギルド内では一番雅葉と仲良くしてくれている。
一言：「双子だけど台詞は同じじゃないわ～」（姉）
一言：「双子だけど台詞は被らないわよ！」（妹）

【ムラタ　ジロー】　２０代後半？　平民
上司というか同僚　黒髪、黒瞳、褐色肌の所謂黒人、チャラいけど仕事中は寡黙な男性事務員。
魔術師ネタの時は何故かよく喋る。
一言：「仕事は仕事、魔術師は魔術師！　で、今度来るディリトアの…（長いので省略）」

【カラル　ケント】　２０代前半？　平民
上司というか同僚　雅葉も羨む（？）やったら色白でピンク色の髪を持つ男性事務員。
ニコニコ笑ってて可愛いお兄さん、でも軟派師。
一言：「え？　職場でナンパ禁止？　堅いコト言わないで遊ぼ～？」

【シルモク　メイサ】　？歳　平民
上司というか同僚　黒髪のロングウェーブ、東南アジアっぽい顔立ち。
魔術師との結婚を夢見る女性事務員。
一言：「目指せ、玉の輿～！」

【緑川　若葉】みどりかわ　わかば　高２

日本での雅葉の親友　腐女子。

雅葉のことが大好きなクラスメイト。

趣味は（ＢＬ）小説（ライトノベル）を書くこと。

雅葉を腐女子にしようと目論んでいたが失敗。

一言：「快世さん受で３本書けそうっすわｗｗｗ」

登場人物紹介【ネタバレ有】（後書き）

雅葉「3本ってタクミ×快世、兄2人×快世、香優さん男体化×快世でおk？」
若葉「流石、心の友と書いて心友！」
雅葉「私のお勧めは冒険者の友人×快世です」
若葉「まだ出て来てないからワカンネwww」
雅葉「まぁボチボチね」
若葉「楽しみw」

快世「寒気がする……風邪引いたか？」
香優「うつさないで頂戴ね？」
タクミ「（アレ、こういう場面って心配するトコじゃ？）」

……作者には男性陣全員が受に見えるYO。

プロローグ（前書き）

驚くことに読んでも読まなくても問題ないです。
プロローグに憧れてるだけなのよん。

プロローグ

『ブエルノ帝国』は１の特別区と８の市、１７の町と１５７の村から成り立ち、総人口約１０００万人で、国家元首として皇帝が存在する国である。

そのたった一つの特別区である『ジャナワ特別区』は人口約１００万人、ブエルノ帝国の首都であり、愛称を『帝都』と呼ぶ。

そしてブエルノ帝国の一都市である『ガンビナ』は【市】である。
市は、町以上の都市で、ある程度の人口（３０万人以上）と、町よりも都市としての自治権が広範囲に及ぶ。
日本で言えば政令指定都市並の権利だろう。
ちなみに町は村以上の人口（３万人以上３０万人未満）を有していることが条件で、村はそれ未満ということになる。

上記で市の代表として名前の挙がったガンビナ市は、首都である帝都のすぐ南に位置し、約３８万人が暮らしている。

ガンビナ市民らの中には帝都に職場があり、そこまで魔法列車を使って通勤する者も居る。
ブエルノ帝国の総人口が約１０００万であることを考えると帝都の

衛星都市(ベッドタウン)とも言えるが、かなりの大都市でもである。

そして、上記の魔法列車のように、この世界には魔法が存在する。

魔法は謂わば地球で言うところの電気・ガスのような存在でもあり、魔法使用内訳は、治癒・移送・冷暖房や照明等の生活に密着した使用方法で９５％を占める。

残りの５％は魔物退治のための詠唱によって発生する攻撃魔法で２％、更なる発展を望む魔術師達の研究で使用されるもの等で３％程度と、この物語はファンタジーではあるが、魔法詠唱による攻撃＋勝利＝姫の救出という数式は現在のところ無い。

更に、此の世界にはギルドも存在し、所謂(いわゆる)何でも仲介屋として機能している。

特に私営ギルドは、建築・建設、掃除代行、人探し、護衛そして凶悪な魔物退治などの業務を、日雇い人や冒険者らに日常的に斡旋(あっせん)するのが生業だ。

私営ギルドの経営者はこの斡旋による仲介料で生計を立てている。

そう、何を隠そう日本で言うところの有料ハローワークなのである。

ギルドは私営以外に国営及び市営もあるため、計三種類が存在する。

大物の魔物を討ち取って一度の依頼達成で多額の現金を得たり、長い期間雇ってくれる飲食店を見つけて家族とその土地に移住したり、旅行で不在にする間に庭掃除を依頼をしたりと、自由にギルドを活用して、この世界では生活していくこととなる。

国営及び市営ギルドは主に生活弱者のため、営利目的ではないので無料で仕事を紹介する。
つまり日本のハローワークと同じである。
モチロン依頼自体も建設・建築の手伝いや掃除代行などの比較的誰でもでき、その分貰える賃金も低めの依頼がほとんどである。
そのため、国営ギルドはどんな過疎地の村にでも必ず一つ存在する。
市営ギルドは自治権のひとつであるため８つの市にしかなく、ソコで働いているものは市職員である。
要は国営と市営のギルド職員は国家または地方公務員なのだ。

そして大事なのはギルドは年中無休で営業していることである。
国営・市営・私営関係なく年中無休。
飲み物・軽食も準備されているし、夜中無性に誰かとコミュニケーションがとりたくなったらギルドに行ったりする。
地球で言えばコンビニの役割も併せ持つ存在なのである。

さて、前振りがやたら長かったが、この物語はブエルノ帝国ガンビナ市にある私営ギルド『ハレルヤ』が舞台となってくる。
このギルドの経営者は大貴族の子息（ボンボン）で、名を太刀花（タチバナ）　快世（カイゼ）という。
が、残念ながら彼はこの物語の主役ではない。
主役は……本編を読んでからのお楽しみである。

プロローグ（後書き）

ということで前作と連動している異世界トリップもの早速投稿でっす。

今回は女子高生にしてみました。

うん、まだ出てきてませんけどね。

【1】　事故った！

キキーッを通り越してガギギッギーッという五月蝿い急ブレーキ音が耳に聞こえた時は、もう時既に遅し。朝午前8時前、私は普段から通学に使用する横断歩道で信号無視してきた馬鹿の車に轢かれた。
強い痛みとおそらく自分の血であろう赤を目撃したのが、地球での最期の思い出だった。

私は伊藤雅葉（イトウ　ワカバ）、17歳、女子高生。
私立の中高一貫の女子高に通う現在二年生で、千葉の市川市に住んでる。
高校の制服が中々可愛いので気に入っている。
自分に似合うかと問われれば、うーん？自信はない。
でも、人に美人と言われたことが結構あるので顔の造り自体は悪くないと思う。
愛想はないので冷たいと思われがちだ。
学友曰く、自分の顔は知的クールビューティー顔というらしい。
知的とクールが被ってる気がすると言ったら、クールは冷たいの意味と言われた。
地味にショックだった。
人の言葉を借りて自分を表現すると、ワンレンの胸下ほどある黒髪

を後ろで三つ編みにして、切れのよい一重で鼻筋とおってて唇は薄くて、チューしたら真っ赤になりそうな色白顔……らしい。
奥手っぽいということだろう。
まぁ、さしても興味がないので間違っちゃいないがとある人物のせいで若干知識に偏りのある耳年増にはなった。
眼鏡していれば学級委員長というあだ名が貰えるらしいが、視力はどちらも2．0だ。
勉強漬けなのにありえなくない？ウケる……とよく失笑される。
中の中なお嬢さん方と完全にギャルとはいわないがギャル化したお嬢さんも在籍している学校で、それなりに楽しく暮らしていた。
まさか自分が通学中に事故に遭うなんて思いもしなかったくらいには……。

私は学校が好きだし、勉強が楽しいと思える人種だ。
頭を捻って解いた問題が正解していると嬉しいし、外れていると次こそは！とますます勉強する。
得意科目は数学で、苦手なのは国語。
数式は正解が決まっているから楽チン。
国語は情感を読めというのが苦手……暗記物の漢字は得意だが。
頭にいろいろ詰め込んでいるけれど、将来何になりたいとかそういうのはなくて。
ただ専業主婦はご時勢的にも自分の適性的にも無理だろうな、と思うのだ。
だって、家事できないし。
テストの成績さえよければ両親は何も言わなかったので、
お手伝いとかあまりしたことがない。
大体、今日（こんにち）の女子高生でまともに家事炊事ができるのは、多分に家が貧しいから、または、趣味が家事炊事なんだろうと思う。
いや、結婚してから真面目に取り組めばいいんだろうけど結婚願望もないし。

いやいやそんなことよりも死んだよ自分。
コレ、完全に死んだ。
マジで？

――あーコレ、死んだわ自分……このまま死んだら何のために勉強したんだろう……――

「生きたいよな？やっぱり」

――当たり前じゃない……――

「じゃぁ、新しい世界に連れてってやるよ！」

――へ？新しい世界……？――

「皇子様とかいるしよ！楽しいぜ、きっと！」

――へぇオウジ様か、楽しそうね……日本にも皇太子様なら居るけどね。というか日本で転生とかでいいわよ？――

「同い年だぞ、フラグ立つかもしれないぜ！さぁ～準備万端だ！行ってこいっ！」

――フラグって緑川ちゃんのよく言うアレのこと？まぁ、いいか。ありがとう、あなた神様かしら……綺麗な女神様……言葉遣い悪いけど。――

「……いや、俺、男……無事着地完了……また女だと思われた……」

【1】　事故った！（後書き）

ハイ、主役登場です。
そして死亡フラグお疲れ様です。
ってかまぁ死んだんですよ、きっと（ヲイ）
作者が悪女っぽい美人が好きなのでこんな容姿にしてみました。

そして投稿5分で致命的ミスをこっそり直すというあわてんぼうさんっぷり。
事故を最初に、自己分析を後に持ってきました。

【2】　揺さぶられた！

私は、大きなお屋敷が建っている庭、屋敷に引けを取らないだだっ広い庭の端っこ、三本の種類の違う木が仲良く植わった植え込みのある小空間で発見された。
発見してくれたのはこの屋敷の植木を管理している使用人の親子だった。

『父さん、女の子が倒れてる！』

『何？！……死んでるのか？』

『気絶してるだけのようだよ』

『おい、大丈夫か？』

『怪我は無いようだよ。揺すってみようか？』
（※揺さぶる行為は怪我がなくても脳にダメージがある場合、非常に危険です。絶対にマネしないでね。）

『おい、あんまり強くはやるなよ、お嬢ちゃん？』

若い男の方が私を肩を掴んで軽く揺すってきた。
父親らしい男は自身の息子と私に声を掛け続ける。

揺さぶられたことで覚醒した私は回りの木々に疑問を覚えてつつ、尋ねた。

「ここは何処ですか……？」

『何？』

ん？何と言ったのだろう？

「あの、ここはどこですか？」

『なんて言ってる？』

あれ？聞き取れない？
こないだのリスニングテスト満点だったのに。
というか英語じゃないハズ……私は通学途中だったんだから……普通出会う確率が一番高いのは日本人よね。

『よくわかんねぇ、語尾が、か、だからディリトア語かもしれない。カイゼ様に前ちょっと教わったことがある』

さて、もしや方言のキツい御仁たちに発見されたのだろうか？
市川市のど真ん中で？
ああ、視線が痛い……。

『とにかくふん縛ばってご当主様に報告した方がいい』

『でも身なりが綺麗だよ、変わってはいるけどさ。何処かのお嬢様なんじゃ……？』

『あぁ？お嬢様がこんな高い塀を乗り越えるかっ！』

私のことを放って置いて二人で話しこんでいたが、年嵩の男が天を指差した。

その指を辿って視線を上に向けると高い壁と3本仲良く並んでいるように見える木がある。

見上げていくうちに根元に何かあったのに気づいて私は視線を根元に戻した。

その木達……樹木三兄弟の根元に小さな立て札がそれぞれ一つづつ立っている。

全ての立て札には文字、漢字が書かれている。

左から、晴緋之木、青空之木、快世之木、だ。

「はるひのき？あおぞらのき？かいよのき？」

なんと読むのだろうと思いながらも思いついた読み方で呟く。

私を無視して喋っていた二人がその呟きを聞きつけ、二人の視線が私に突き刺さる。

私に対して注意は逸らしていなかったらしい。

『今、貴字（きじ）を読んだよな？』

『ハルヒ……様と読んでいたようですよね？ハルヒ様のお知り合いなんでしょうか？……まさか愛人とか隠し子……？』

『んなわけねぇだろうがっ！』

周りをきょろきょろと見回した。

めちゃくちゃでかい家と広い庭、完。

何処？

皇居？
いや、建物が西洋っぽい？
というかアラビアンな感じか……。
とりあえず、ココ何処だ？
そういえば私は事故にあったんじゃなかったか？
むっちゃくちゃ痛かったし、相手の馬鹿は全速力（？）でぶつかってきたっぽいし、
私はほぼ即死だったのだろう。
つまり、ココは……

「ココは天国ですか？地獄ですか？えっと英語の方がいいかな？Ｉｓ ｈｅｒｅ Ｈｅａｖｅｎ ｏｒ Ｈｅｌｌ？」

『ほら、語尾が、か、だろ？　多分ディリトア語で間違いないよ！
最後は、か、が付いてないけど！』

『とりあえず俺がご当主様に報告してくる。お前は逃げ出さんように見張っておけ』

『う、うん』

『仕事中は、ハイ、だ！何度も教えただろうが！！！』

『ハイ！すみません！』

無視というか私に対しての返答なし。
んーなんか若い方が怒られてる？
天国でも地獄でもなさそうだし？
私死ぬ予定じゃなかったとか？
この人たちは死神とか？

あ、私を勝手に早死にさせたから、私を担当するヒヨっ子のコイツが怒られたんだ！
なんだ、じゃぁまた倒れてスムーズに戻れるようにしておこう。
事故もなかったことになってるかもしれないし。

パタッという結構可愛らしい音で私は倒れこみました。
覚醒してからもともと、乙女座りという名の足をだらりとさせて両手を胸よりちょっと前で突いてか弱く見えるポーズで座っていた私は、手首に力が入らなくなったような感じで崩れるように倒れたのです。
今日は数学の小テストあるんだから間に合えばいいけれどと考えながら。
また満点取るつもりなんだから。
ううん、満点しか取るつもりがないんだから。
なんて考えてしまったら、頭がくらっと……貧血かな？
演技で倒れようとしたけど、本気で気を失ってしまいました。

『えっ？お嬢さんっ？』

再度気がついたのはそれから3時間後くらいらしいです。
貴族のお屋敷の庭に倒れてたようです。
そしてどうやら日本じゃないようです。
じゃぁ……何処？

【2】　揺さぶられた！（後書き）

……うん、ワカバちゃん異世界認識してないけどね。
異世界で目覚めました、おはようさん。

誤字訂正しました。報告ありがとうございました。

補足
1：『』がブエルノ帝国語で喋ってます。
「アシャシェサネリンフィジエフェイ！」
とかのほうが良かったって？
なるほど！うん、判らん。
2：この世界の貴字（きじ）は漢字のことです。
「貴族が使う文字」の略で造語です。
使用人は貴族じゃないので貴字は基本的に読めない。
自分の仕えてる人たちの名前くらいは覚えさせられるけどね。
3：4／9に大幅に改稿しました。

【3】　魔法だと！

衆人環視の下で目が覚めた私は、再度、ココは？と呟いてしまいました。
その返答として「ココは太刀花（タチバナ）家の客間です、お嬢さん。」という日本語が聞こえたのです。
声の聞こえる方を振り向いたら、私はきょとんという擬音が似合う固まり方をしてしまいましてよ？（何故疑問系）
だって奥様（誰？）聞いてくださいます？、驚きましてよ？（何？）
１７年という短い人生ではありましたが、私の目の前に見たこともないような金髪碧眼の美丈夫（今風に言うとイケメン）がいたのだっ！（興奮）
コイツ……この人があの流暢な日本語（ジャパニーズ）を喋ったというのか？

「橘さんのお宅ですか？」

でも苗字はタチバナさんとは……、あぁ、ハーフなのか？

「そうだよ。あぁ、間違いなくディリトア語だね。よかったよ、たまたま実家に帰ってきてて」

「ディ…？」

何語と言った？
私は普通に日本語を喋ってるんだけど？

「咽喉が渇きませんか？お茶を飲みますか？」

「あ、はい……いただきます」

そういえば私の身体はいつの間にかに部屋の中に移動していた。

『ディリトア語だね……まぁ誰かお茶を持ってきてくれ』

『畏まりました』

イケメンさんは使用人らしき人におそらくお茶を持ってくるように言ったんだろうが、どれがお茶という単語で、どれが持って来いという単語なのかが私には判らない。
彼は何人とのハーフなんだろうか？

「さて、私の名前は太刀花（タチバナ）快世（カイゼ）。あなたのお名前をお聞かせください」

イケメンさんのお名前はカイゼさん、か。
日本人といえば日本人っぽい名前だし、違うと言われれば違う気もする。

「あ、私の名前は伊藤（イトウ）雅葉（ワカバ）です。えっと、先ほど私は大きな庭で倒れていたと思うのですが、ここはどこですか？」

「はい、倒れていましたね、ちょうどあのあたりですよ。この場所は太刀花家本邸の客間です。太刀花家は、ブエルノ帝国四大貴族の内の一貴族として有名な方なのですが……イトウと言う苗字は聞いたことがありませんね？本日は私の家の庭までどちらからいらっし

ゃったのですか？」

なるほどココは先ほどのお屋敷の一部屋か。
ものすごいゴージャスなので納得。
あぁ、品のいいゴージャスッぷりです。
でも伊藤に聞き覚えがないって有り得ない……。

「え、日本じゃ伊藤はメジャーな苗字だと思いますが？私は市川市の自宅から学校に通う途中で車に轢かれました。直ぐに気を失ったようで、貴方の家の庭で倒れた記憶がないんです」

伊藤って鈴木と佐藤ほどじゃないけどそこらじゅうに居るよねぇ？

「車に轢かれた？魔法列車ではなく、小型の魔法移送車ということですか？それとも獣車（じゅうしゃ）ですか？観光用の人力車ですか？外傷は何処にもありませんでしたよ？」

「え、マホウ？マホウレッシャ？」

マホウって魔法？

「……魔法による移動手段を見たことがないのですか？」

「え、魔法が実在するわけないでしょう？魔法で動かすんですか？列車を？」

なんかファンタジーの世界が、来たぞ……。

いやぁ……イケメンが魔法とか言っても普通に許されるね。
一瞬普通に納得したからね。

イケメンは何しても許されるのよ！って豪語してたクラスメイトの緑川ちゃん、そう、あの生徒に黒板に解答を書かせるのが趣味の数学の先生の授業前の休み時間、「この問題当てられそうなの、答え写さして～」って言ってのこのこ私の前に来たほとんど自分で解いたことのないアンタは正しかったよ。
数学は出来なかったようだけど、世の中の真理はよく分かっていたんだね。

「魔法を知らない……？そうですよ、魔法で動かすんです」

ピクピクッという擬音が正しく当てはまるかのように口元が引きつり、目の前のイケメン、……カイゼさんが私の台詞に動揺を走らせた。

「電気じゃないんですか？」

「電気とは？」

え、電気知らないの？
じゃぁこの部屋の明るさは何で？

「え？電気……雷とかのエネルギー元ですよね？」

ん？違うかな？

「エネルギーはサリエ語で活動力の意味だったかな。魔法は専門外ですが、習った知識程度で言えば、雷の活動力、つまり動力源は風の精霊の怒気です。それを電気というのならば列車の動力源は違いますね。風の精霊の優しさ、ですから。先ほどもメジャーと言っていましたし、あなたはサリエ語にも精通しているんですね……」

「サリエ語？風の精霊？優しさ？」

えーっとこの人、童話作家とかですか？

「……私の言葉は理解できているけれど、私からの情報が理解できないと言う感じですか？」

あぁ、そんな感じです。

「えっと……ハイ……そうだと思います」

「地図を持ってこさせます、ソレを見ながらお話しましょう」

「はい、お願いします」

『世界地図とブエルノ帝国地図と帝都明細図を持ってきてくれ』

『畏まりました』

んーやっぱり何を喋っているのやら。

地図という単語に当てはまるものがあるはずだけど……どれだろ？

「どうして無傷なんでしょう、私。自分の血を見てから、気を失った気がするのに」

いただいたお茶が日本茶……しかも高いヤツなのか美味しい。

現代風に言えばメッチャ美味(うま)い、マジ美味(うま)い。ヤバ美味(うま)い。

ふむ、若干の甘味があるから心情的にメッチャ美味(うま)いにしておこう

かな？
いや、ホントに特別メッチャを採用した意味はないんだけど。

「ふむ、君の話を総合すると、君は交通事故に遭い、痛みを感じ、自身の血を見て、事故現場でそのまま気絶したという記憶があるにもかかわらず、見知らぬ私の家の庭で倒れていた。ということになるよね。話してる最中に君を魔法探知させてもらったけど、君の情報が出てこないんだ。指名手配もされていないし、行方不明者の中にイトウワカバはいない。魔動力も０って出るし。嘘をついてるって反応もないし、正直こちらも判らない。専門家じゃないから簡単な調査だが、失礼だが君に黙ってなのにだ。本当に君には何が起こったんだろう。あぁ、地図が来たようだよ」

また魔法……しかも何か私に対して使われたようです。
黙って調査した……って普通、不審者に「あなたを調べます、お覚悟を！」とか言いませんから、どーぞどーぞ。

【3】　魔法だと！（後書き）

はい、イケメン登場。拍手～。
髪と目の色だけ指定しました。
お好きなようにご想像ください。

あ、私のカイゼ氏のイメージは名作と信じて疑わないアニメ
昔衛星アニメ劇場でやってた快傑ゾ■の主人公・表の顔Ｖｅｒです。
ほわほわした優男ですな。

【4】　日本を探せ！

テーブル（といってもかなり豪華な造りである。脚や縁の装飾が半端ない、角に足とかぶつけたら相当痛いハズだ。）の上に、使用人が持ってきた大中小とやっぱり地図も三兄弟で全ての地図が所狭しに広げられた。

「あ、はい……えっと世界地図から見せていただきたいです。まず日本を探したいんです」

これがライトノベルとかマンガに出てくるような異世界トリップ、召喚モノという設定なら、日本のあの細長い形は……いや、希望は捨てまい。

私が世界地図を、と言った後に快世さんが、世界地図らしく大陸が書かれている中サイズの地図を私の目の前に移動させた。

世界地図には一際目立つ大きな大陸が４つあった。

おそらく赤道を境に、北に２つと南に２つ。

北極や南極大陸らしきものは描かれていない。

北半球のど真ん中にあるのはカナダとアラスカ部分がない北アメリカ大陸で、一番大きい大陸が少し幅の狭いユーラシア大陸みたいだった。

それにしても地球と比べ、圧倒的に陸地が少ない気がする。

「世界地図はコレです。ここがブエルノ帝国。あなたの国……ニホンでしたか？見つかりましたか？」

北半球のど真ん中に大陸があって武得野帝国と漢字で書かれている。
快世さんが指差したアメリカもどきだ。
ほう、ブエルノは漢字でこう書くのか。
その左に日本みたいな島国があるけど形はひし形っぽい。
しかも位置的にアメリカから見てハワイあたりの距離感だ。
その島国は漢字で伊穂群島国と書いてある。
その更に左に、武得野帝国と書かれた大陸より大きな大陸があって、
その中心部よりやや右にずれて禰理永遠王国と書かれている。
だが、肝心な日本がない。
まさか！とは思ったが……南半球にもなかった。

「ありません。日本の形は細長い本島と上下に４つほどの小島、更に小さい島々が集まった国ですが、見つけられません」

「……ないですか？……うーんニホンか、語感はイホ群島国と似てるんだけど。これはもう宮廷魔術師に調べてもらうしかないか……」

「キュウテイマジュツ……あ、イホってこれですよね？」

キュウテイマジュツシって宮廷魔術師という漢字しか当てはまらないよね、おそらく。

「そうだよ。あぁ貴字（キジ）が読めるんだったね？」

「貴字？漢字のことでしょうか？こっちはもしかしてさっきのディ何とか王国ですか？」

私は禰理永遠王国と書かれた大陸を指差す。

「あぁ、ディリトア王国。貴字は帝国の貴族階級しか使ってない文字なんだ」

お、そういえば貴族といえばルネッサンス？
お笑い芸……いやいや、貴族って身分制度があるのか。
快世さん、自分の家は有名な貴族って言ってたけど。
地球上でいまどき身分制度がある国あったかなぁ？
カースト制のインドくらいしか思いつかないや。

「私の国には皇族はいても貴族はいませんけど？」

そういえば天皇って英訳するときキングじゃなくてエンペラーを当てるらしいね。
日本語で皇帝、平成皇帝……うーん？あ、でも名前＋皇帝で呼ぶのか。

「そうか……大体判った。ニホンのことは宮廷魔術師に押し付けよう。雅葉さんだったかな？とりあえずこの国のこと勉強しようか？」

え、イキナリなんだか吹っ切った？
とりあえず大事件です、勉強が出来ます。
うん？そういえば思いっきり不法侵入だった。
謝るタイミングがつかめませんでしたよ。
じゃなくて勉強と聞くとやる気が出る17歳な私って。
遊びとか恋人とかに情熱掛けてたらこんなとこに来なかったのかなぁ？

「あぁ、そうだ。お茶を気に入っていただけて何よりだよ。大丈夫、今更不法侵入なんて思っちゃいないさ。あと、私はギルドマスターをしていてね、残念ながら童話作家ではないんだ。最後に、【イケ

メン】って何かな？」

「！」

心読まれてた！！！

ニヤリと笑うけどそんなに厭味じゃない、悪戯成功、やったねみたいな笑み。

そういえば調査がどうの、嘘がどうのとか仰ってましたね！

「イケメンは美丈夫のことです……サリエ語でハンサム？」

「そうか、ありがとう」

また笑った。

今度は擬音がニコッです、満面の笑みってヤツ。

目の保養です、ゴチです。

あ、心の中読まれてるんだっけ、魔法で？

……クラスメイトのイケメン好きの緑川ちゃん、イケメンは何しても許されるかもしれないらしいけど、こっち側の心の声ダダ漏れですが、あなたなら耐えられますか？……私は無理っす。

よし、こうなったら緑川ちゃんの大好きなマンガに載ってた奥義【イケメン同士で性技（せいぎ）くんずほぐれつ】とかどうだろう。

ちょいと裸の男二人組でいちゃいちゃを想像したら、快世さんは引き攣った顔になって顔色が悪くなりました。

「ゴメン。魔法調査即遮断させるから止めてくれる？」

ふ、性技もとい正義は勝ちました。

迷惑防止条例に引っかかるようなことしてる人が悪いんですよ。

というか女子高生がそんなもの読んじゃ駄目だって？

１８禁って書いてなかったから平気。
というか同性同士の恋愛とか禁止な世界なのかな？
だったら……えーと……うん、大丈夫……根拠は無いけど。

【4】　日本を探せ！（後書き）

日本って島国だから書き表すのめんどくさいな、と。
しばらく快世兄さんとイチャイチャ続きます。
う、うらやましくなんかないんだからねっ！
ちなみに雅葉ちゃん同性愛特に禁止されてない設定だから安心して。
緑川ちゃんは腐女子、将来の夢が作家の数学が苦手っ子。

【5】　オモチャにされた！

さぁて、勉強とは言われましたが17歳はもう働いてる年齢って聞いたので、勉強だけじゃお金は稼げないし、生きるために何すればいいか考えないと。

まぁ、勉強と言われつつ、保護されてから2日間ほどは快世さんのお母さん（これまた金髪碧眼の美人、快世兄さんは母似です）に着せ替え人形にされて、おっと帝国の服飾はちょいアラビアンな感じです、着こなすのに胸欲しいな……えー日本語で言うと何だ？……弄ばれたんだけど。

娘が欲しかったのに出来なかったのよぉ～とか言ってたそうです。

何処からか服を引っ張り出しては着せ替えられる～。

その旦那さん、つまり快世兄さんのお父さん（銀髪…白髪に非ず。瞳は青のダンディーオジサマ）と侍女さんたちとカイゼさんがほほえましく見てるけど……助けて～。

うん、正直ちょっと日本じゃ着れないようなドレスとかだから楽しいけどね。

流石に一日中ファッションショー、モデル私だけ×2日、言っていい台詞はブエルノ語で『お母様、このドレスはちょっと……』と『お母様、これが気に入りましたわ』と『お母様、お茶にしませんか？』を17：2：1の割合で使えとか超疲れました。

不満が17なのはモチロン何度もお色直しさせるためですよ。

ちなみに服はご自分が若いときのモノだそうで、実家から最速便という名の配達魔法で送ってもらったそうです。

意外に物持ちいいんだな、貴族って。という感想でいいのかな？まぁいいや。
散々着せ替えさせられた挙句、今の流行じゃないし、と呟かれました。
ちなみに今の流行はレースのアクセントだそうです。
アラビアン×レースって言葉に表すの中々難しい。
オーダーメイドを提案されましたが、返せる当てもない（無一文から何もとらないわよ、あげるわよ！とは言ってましたが）大量の好意をいきなりには受けきれない私としては心底やめて欲しかったので辞退しました。
流行に併せて多少手直しされたお下がりをありがたくいただきました。
何十着というより何百着手直ししたのかよくわからないですが、いつの間にかに私専用の衣裳部屋ができてました……。
あ、専用メイドさん（侍女）は必死でお断りしました。
自分の身の回りくらい自分で頑張るぞー、オーッ！（投げやり）
しっかし一枚のドレスで家もとい城買えそうとかいうレベルのもの混ぜないで欲しい。
染みとか破れたりとかＫＯ・ＷＡ・Ｉ……。
やっぱ侍女さんにお手伝いを……イヤイヤイヤ。
ちなみにお下がりといえど胸のところがガバガバなので詰められました。
どうせＡに限りなく近いＢカップですよぅ～。
カイゼ母様（かかさま）が胸が大きくなる食べ物を惜しげもなくお取寄せをしてくれて、毎食、男性陣にわからないようにさりげなく食べさせてくれてます。
姉御と呼ぶのは駄目ですか『お母様』？

太刀花家本邸は皇帝が住む皇城の南側、つまり帝都に建っております。
後々聞いたら、快世さんは仕事の関係で両親の話を聞こうと、たまたまあの家にいたとのこと。
たまたまとは、快世さんは普段、自身が経営する職場（ギルド）が帝都の直ぐ南に位置するガンビナ市にあるため、親離れも意識し、居住地もガンビナ市にしたので、実家には滅多に帰らないそうなのだ。
庭師の親子の親の方が、庭で変な女の子もといお嬢様モドキ（＝私）を発見したということで走って屋敷内に入ってきたから、そんなに慌ててどうした？と声を掛けたそうな。
事情を聞いて、再度気絶した私を観察してから、思案したそうです。
両親に不審者として突き出すと主に母にオモチャにされるかなと。
それが自分が調査官役になった経緯とのこと。
うん、既にオモチャになりましたが、何か？
えーまた、誤解が。
意味的には性的なものだそうです。
え？母にって言ったよね？父じゃなくて……また、訂正。
三人息子がいるので「お前は三人のうちの誰の愛人（恋人）なのか」長男さんの年齢（３９歳）的に隠し子という選択肢もありだよ正直にお言い、と意地悪く聞いてくると思うんだという意味でした……イヤン。
あ、長男さんと次男さん（３３歳）は既婚者だそうです。

【5】　オモチャにされた！（後書き）

快世父母の名前を考えていないのだ……。
書いてないけどワカバは一人っ子設定。

着せかえってトリップ王道だよね……
王国は西洋風、帝国はアラビアン。
母の愛作戦（胸が成長するか）は今後に期待。

【6】　太刀花家紹介！

快世兄さんから聞くに、建国時代の英雄譚まで語ると面倒なので略しますが、太刀花家とは建国時からの生粋の貴族で、氏の貴字（キジ）（漢字）に太刀があるとおり武芸に特化した一族、ちなみに家紋は赤い鳥だそうで……朱雀？
ＲＰＧに出てくるような勇者が初期に持つブロードソードのような幅が広い剣による剣技・軍略に秀でているとのこと。
えー……と諸葛亮？

快世兄さん本人は冒険者になるつもりで頑張ったけど、将軍や一級冒険者になる才能まではなかったので会社経営してると仰っていました。
でもその辺のチンピラとか軍の階級ない兵士さんたちよりは強いそうです。
実際後から聞いた他人の評価では二流の冒険者よりちょい弱程度……、謙遜ですか、そうですか……。
冒険者の一流と二流の違いが分からないけどね……。
しかし、非常にモテるだろうな～、金持ちでイケメンで話が面白いです。
三兄弟中、快世兄さんだけまだ独身って言ってたけど何故でしょう？
皇女様に振られたけど、彼女が忘れられないとかでしょうか？
あれ、皇子様は居るけど皇女様って居なかったか……
あれ？何で私、皇子様が居るって知ってるんだっけ？
ん～快世先生に授業のとき聞いたんだっけ？

職業、ギルドマスターという名の社長、そして独身、しかし跡継ぎではない！
いや、アレです、嫁姑問題が無くていいなと思ったんです。
日本の未婚女性たち飛びつきますね、コレ。
既婚女性も飛びつきます？……そ、そうですか。
年が１０歳も離れてる所為か、私に対してお兄ちゃんな態度で接してくるから、私ってばこんなイケメンの兄貴が居るのよ、羨ましいでしょ？！
悔しかったらあなたのお兄様全身整形してらっしゃい、な感じになってきました。
これで彼がもうちょっと若かったらきっと好きになってたかもしれないなぁ。
自分の立場とか、顔とか、スタイルとかまーったく弁えずにね。
まぁ恋に生きる乙女モードになってる場合じゃないし、柄でもないから今更恋愛事なんてどうでもいいけど。

長男さんは基本的に実家である本家にいるので夜会えました。
快世さんとそのお母さんによく似た金髪碧眼のイケメン……年齢的に紳士にしておくか……知的眼鏡紳士でした！
仕事が所謂大手銀行の行員だそうで帝都にある職場に出社してるそうです。
貴族の長男が銀行員？と思ったら、次男が跡継ぎだそうな。
それでも違和感は拭えません、何故銀行員……。
お金が好きだからと爽やかな笑顔で答えてくださいました。
あぁ、日本の私の貯金、お兄様のお勤めの銀行に全額預金し直します。
素敵過ぎる、大貴族なのに。
何か裏がありそうですが面倒なのでもう考えるのは放棄しました。
晴緋（ハルヒ）兄さん万歳、素敵。
あ、ハルヒは長兄さんのお名前です。

ちなみに御歳は３９歳、妻子ありです。

で、青空と書いてアソラと読ませるのが次兄さん。
樹木三兄弟の立て札に有った貴字ですね。
ガキどもがすくすくぶっちゃけ勝手に育ちますようにという願いを込めて子供が産まれるごとに植えたそうです。
三兄弟のお父さん、つまり当主様がそうお話してくれたんですけど、まさしくそんな感じのお貴族様らしくない口調で言ってたんです。
多分照れたのです。
緑川ちゃ……さすがにもういいか。
ちなみに私のために皆さん今のところ王国語で話してくれてます。
そして青空兄さんも案の定イケメンなわけで。
青空兄さんは父親似で銀髪の青眼だそうな。
お城で近衛軍の要職（近衛団長）についてるらしく、皇城内にお部屋を借りているので本家には基本的に帰ってこないそうです。
なのでしばらく次男の青空兄さんのご尊顔はお預け。
御歳は３３歳、妻子ありですよ～。

現当主（快世さんのお父さん）は最近まで帝国軍の最高責任者である将軍としてお城勤めされてたそうです。
将軍、響きだけでもカッコいいよ、快世父様（ととさま）。
御歳は６０歳、まだまだ死なん！が口癖です！
ちなみに帝国の平均寿命は７０歳だそうです。

そしてそんな美形一家の中で紅一点のお母様。
金髪碧眼の迫力系美人さんですっ。３９歳の息子さんと並んでも姉弟にしか見えないくらい若々しいです。
日本でも何とかの魔女って番組やってましたね。
あの番組に出れますよ。

コーカソイド系のお顔でその若さを保つのは奇跡ではっ……！と思いました。
若かりし頃は社交界の華だったわ、とのこと。
姉さん女房とのことで当主様より更に上とのことです……年齢はヒ・ミ・ツとのこと。

まぁ簡単に言うと太刀花家本家美形一家なんですよ。
緑川ちゃんが狂喜乱舞しそうなくらい。
あれ、思い返すと私って緑川ちゃんのこと（友達として）好きなんだなぁ……
あっちは便利屋としか思ってないかもしれないけど。
なんかあんまり考えたことなかった。
保護されてから3日後の夜にホームシックで泣きながら寝ちゃいました。
家族のことじゃなくて緑川ちゃんを思って泣くって私ってかなり親不孝な娘だなぁ。

さて、気を取り直して他の貴族も美形ばっかりなのかと聞いたら、昔から金持ちは金の力で自分好みの人に子供作らせるから、好みの顔が美形と言われる系統の顔だったら代が続けばそんな顔ばっかになるよね、とメンデルの法則よろしく理に適った答えをくださいました。
つまり貴族の中にも前衛的な好みの所為で残念な顔の人もいるってことで……。
ということで緑川ちゃん的には非常に為になるトークでした。
緑川ちゃんとまたお話できる機会があればそんなこと話したいです。
そんなことより成仏しろって言われそうだけど。

私の葬式終わったかな？
さすがに今日は両親のことを想って泣こうかな。
私は今優しい人たちに囲まれてるので心配しないでください。
こんな状況でも勉強は楽しいです。

【6】　太刀花家紹介！（後書き）

４／９改稿につき太刀花家紹介独立しました。

【7】　勉強は楽しいな！【前編】

えーっと、数日の勉強の中で判ったことはココは日本じゃない、地球でもない、つまりは異世界。
異世界の中でも一、二を争う大国、ブエルノ帝国の首都ジャナワ特別区で通称が帝都。
　話し言葉は異世界語のブエルノ語、ただし主語＋目的語＋述語なので文章の構成順は日本語と同じ、書き言葉は日本語と同じで漢字、ひらがなとカタカナがあります。
漢字が貴字（きじ）で、ひらがな及びカタカナが民字（みんじ）と呼ぶそうな。
　身分階級制度があり、皇族、貴族（爵位は公＞侯＞伯＞子＞男）、その他（平民と呼ぶ）と比較的大雑把です。
商人や軍人、農民など貴族以外は幼少時に神学校とやらに通って、カタカナとひらがなの文字と簡単な算数のお勉強をするそうです。
　そして庶民がカタカナとひらがなを使い分けるのは意味が通るように、です。
文章中、大雑把に言うと、主語、目的語や述語はカタカナ、挨拶・接続詞・助動詞がひらがなで表示されます。
でも結局意味がわかればいいので結構好き勝手に書くらしいですが。
なので貴族以外に対しての自己紹介文をわかりやすく日本語で書くとこんな感じ。
はじめまして、ワタシのナマエはイトウワカバです。
イセカイのニホンからキマシタ。テキイはナイです……なんて書いてみたり。
ただ、ひらがな及び対応するカタカナの発音が日本語とは別なので、日本人には暗号みたいで慣れるまでちょっと大変です。

『あいうえお』を『いろはにほ』と読むのだという感覚でお考えくださいませ。
貴字は読み方がひとつだけで『得』は『える』、『愛』は『め』と読むとな。
日本語では『愛』を例示して『あい』『めでる』『まな』と何通りも読むよと伝えたら、そんなの全部覚えてたら一生勉強だけで何もできん！と言われました。
そういえば日本は勤勉さが国家の売りだった気がする。
ショックだったのが魚をあまり食べない文化らしくて、鮪（まぐろ）とか鰆（さわら）などの漢字自体が無いです。
あんた達人生損してるよ、寿司美味いのに。

さて、歴史も習ったんですが、独立戦争に勝った元植民地という歴史でアメリカっぽいのに使用言語が周辺国の言語ではなく、オリジナリティ溢れてる日本語モドキなのが不思議です。
初代皇帝が諸外国に情報を漏らさないようにと新規言語開発させたとのことです。
えーそれってカッコよすぎませんか？

ちなみに皇室の氏は深剣（みつるぎ）家、太刀花家が得意とするブロードソードより細身の剣であるレイピアに昔は精通していましたが、現在は統治者一家なだけに統治力特化、剣術はたしなみ程度とのこと。
政治的思惑とやらで皆様ご成長をお楽しみ中な１７歳と、双子で１２歳の３人の皇子様がいるそうです。
残念ながら皇女様はいらっしゃらないそうです。

そして四大貴族の氏の音が、日本でも聞いたことある有名なものなのです。

水元(みなもと)家、商売好きだそうです、個人的に寿司のための魚、しょうゆとわさび、そして米買い付けたい。
兄弟仲は悪くないですか？と聞いたら悪くないと言われました。
兄弟仲悪いのは日本の源氏だけかな。

平良(たいら)家、建築好き、地球の高層ビル見せてあげたい。
えーっと……水元家と仲悪くはないですよ？

富地原(ふぢはら)家、芸術を愛してるそうです。
芸術愛といいつつ、現在の宰相はここ出身の方。
宰相は皇帝の政務の補佐役です。
藤原じゃないのか、名字的に皇帝の座狙ってないか？
と日本人である私は言いたい。
藤原氏ってかなり威張ってたよね、平安時代。

太刀花(たちばな)家、武力・軍略の参謀タイプ。

うーん偶然か源平藤橘(げんぺいとうきつ)に似てる……発音だけだったら同じですね。
皇室を含めて五大貴族とも言うそうです。
独立戦争時の功労者が祖先だそうです。
四大貴族に優劣は昔あったけど今は無いそうな。
昔のたっちぃ（太刀花家に私がつけた愛称）は戦争時の戦功もあり、
四大貴族の仲では1番だったらしいですが、平和が続くにつれて平等になってきたとのコト。
この四家は公爵家でございます。

現在絶賛勉強中な私は素敵なお兄様(カイゼさん)とお喋りするために主に語学

の勉強、帝国語を覚えております。
こんなイケメンに教えられて覚えられない方がおかし……馬鹿なんです！（言い切った！）
最近自分が発情期みたい（下品？）でイケメンイケメン言ってます。
日本のイケメンでは物足りなかったのかな。
そういうことにしておこう。
緑川ちゃんに会えたら沢山話したいことあるんだけどなぁ……。
とりあえず新しい知識を得るためにもお喋りって大事なのねと痛感。
近所の井戸端会議のオバちゃんたち、馬鹿にしててごめんなさい。
異世界に来てから沢山お喋りするようになりました。
そうしないとブエルノ語覚えられないしね。

ちなみに魔動力が無い身元不明の少女を太刀花家が保護したということで、異世界からの何らかの力で召喚された者の存在があるので研究するように、と皇帝から宮廷魔術師には正直に伝わっているそうなんだが……？
普通隠すんじゃ？……緑川ちゃん所有のライトノベルはひた隠してたよ？
何のためか男装とかしてて、性別まで隠してたよ？
それって人体実験とかされそうで嫌なんですけど？と正直に言ったら国内勢力で太刀花家から攫ってまで実験したい馬鹿がいるかな～？まぁ、用心というか警護は勿論するよ。と言われました。
うーん……太刀花家の大貴族設定がありがたかったです。
あれ？研究対象のいない状態で研究させられる魔術師も可哀想じゃないか。
そういえば私何でココ来たんだろう？
勇者とか？そういうのは面倒くさいなぁ。
でも魔獣の生贄になるとかはなさそう、冒険者がサクサク倒しちゃ

うそうだし……多分。
緑川ちゃんのライトノベルもうちょっと借りて読めばよかった……
何かの参考になったかもしれないのに。

魔動力とは所謂魔力のこと。
某アニメの戦闘力を測定する装置みたいのがあって、私の潜在魔動力を計ると０（ゼロ）と表示されるのです。
あ、数字は基本アラビア数字を使用していているそうでした、良かった。
でもこの世界で魔動力０はありえないことらしく、生きてはいけますが不自由……いや、でも、この分じゃ世界を救う勇者路線じゃなさそうな予感です。

そして、快世兄さんの言っていた魔法列車は、風の精霊の魔動力で動いてるというファンタジー原理らしく、地球人が理解するのに一番いい方法は魔法が電気代わりです。
精霊とやらを見てみたいですが、参考魔動力５００くらい、かなり優秀な魔術師レベルでないと見れないそうな。
ちなみに魔術師ではない庶民の平均が３０程度なので、魔動力５００は庶民約１７人分です。
まぁ実際その辺ふよふよ居るそうなので見えたら見えたで気になるわな。

【7】　勉強は楽しいな！【前編】（後書き）

ということで改稿につき勉強前中後編となりました。
勉強好きすぎだろ、お前。

【8】　勉強は楽しいな！【中編】

あとは一日２４時間なのは地球と同じですが、一週間が１２日で、一ヶ月が１２週間あり、一年は１２ヶ月ということです。
一年が１２の三乗、つまり１，７２８日あるって……何ソレ？
私の世界では３６５日が一年だったんです、私はここの人たちより５倍早く老化するんですか？とカイゼ兄さんに涙目で聞いたら、非常にびっくりされまして、その件も併せて地球との相違部分は全て宮廷魔術師に確認するとのコト。
その宮廷魔術師たちもディリトア国の凄い魔術師にそれとなく意見を聞いてみるとか、何だか大掛かりなことになってきました。
ん？だからその凄い魔術師に人体実験されるから止め……！
聞いた話によるとそのディリトアの魔術師は魔動力８０００くらいあるとか！
帝国の宮廷魔術師の平均値が６００くらいなので、他国からは王国最高の戦争抑止力、眠れる獅子やら生ける神てな扱いだそうな。
その魔術師本人がまだ若くって……１７歳だそうです、同い年ｏｒｚと思ったら、あちらさん数え年なので満１６歳とのこと、戦前の日本みたい。
帝国は満年齢で年齢計算するので、誕生日が来たら１歳、歳をとるのです。
こちらは現代日本と同じですね。
で、ディリトア王国自体はその辺の１７歳と大魔術師様を大して区別というか差別つけてないそうです。

あえて差別しているとしたらその有り余る魔動力を使って、彼一人で城を守る結界を張っているそうです。
防衛の経費が浮いたそうです、なるほど。
あと差別するとしたら、戦争が起こったら人間兵器にされるとか。
でも庶民２６７人分と考えれば大したことなんじゃ……と思いきや、彼一人で王国内から他国に向けて短時間で焦土に出来る技術と魔動力があるそうで……恐れているのはその技術の方とのことです。
怖いよ、何それインゲン……じゃなかった人間？
魔術大国だから平均も高いって言うけど、それでもディリトア王国の宮廷魔術師平均魔動力量８００程度で、８０００は流石にいないそうです。
その人に拉致されたらお終いじゃないですか！と喚くと、うん、そうだね、最初に謝っとくね、ゴメンね。と苦笑されました。
カイゼ兄さん楽観主義だなぁ……大丈夫か？
でも、その魔術師、最近出会って2日で１０歳も年上の女性と結婚したとか。
どんだけスピード婚ですか、それ。
奥様にメロメロで、出仕お休みして買い物に付き合ったりしてるらしいです。
結界は勿論張ってますとのこと、遠隔操作できるそうです、彼……。
原理は魔方陣の組込み方がどうのこうのと、何となく集積回路的な感じかな？
普通はというかまだ他の魔術師達は遠隔操作出来ないらしい。
特許制度とかあるのかな？
情報開示を請求して……違うか、ご結婚おめでとうございます、奥様、ぜひ最終兵器な彼氏さんとずっとイチャイチャしててください。
……なんだろう、祝福する気になってしまった、そして誤魔化された？
しかし、１０歳年上……私で言うとカイゼ兄さんか。

……微妙です、私は年近いほうがいいな。

あれ、そもそも１７歳で結婚出来るのかとお思いでしょうが……両国とも法的に男女１６歳から結婚出来るとのことですっ。そういえば日本でも私は結婚できる年だった、女の子だし。

後日、帝国の宮廷魔術師から、女性には大変失礼とは思いますが……観察……診察なども諸事情（お貴族サマの圧力）によりできませんため、髪の毛や爪の伸び方、月経の状況を適度に報告してくださいとのこと。

わーい……そうだ月経の存在があった！

言われるまで気付かなかった、恥ずかしかった！

でも確かに調べる材料としては的確ですね。

さて、３週間（３６日間）みっちり勉強したお陰で話すのには大分苦労しなくなりました。

お、そういえば月経来てないな。

生死にかかわる事故で相当血が流れたし、もともと不順だったし。

日本での事故の傷全く無いけど。

現代日本人にはありがたいことに、メール送受信モドキな魔法があるので、こちらに来て３６日経ちました、まだ月経が来ないですが、元々不順気味でした。

前回の最終日から７０日は経ってると思います。と書いて送っときました。

コレ読んでくれるの女性がいいなぁ……。

【8】　勉強は楽しいな！【中編】（後書き）

４／９改稿しましたです。

【9】　勉強は楽しいな！【後編】

そして話せるようになってきた私に、ついにお仕事が決まりました。
快世さんのお仕事のお手伝いです。
会社(ギルド)の経理をやって欲しいとのこと。
数字大好きなので頑張ります！とお答えしました。
今回は銀行員の晴緋兄さんに見かけが数字という名のお金だよ、計算間違いがあったら大惨事だから気をつけてねと優しく諭され、企業経営とお金に関してのレクチャーを受けました。

お金は単位がなんと獲(とる)でしたのです。
ドルじゃないのよ、ドルじゃ。
でもドルとは違い、単位が獲しかないので大分楽です。
金貨とか銀貨とかじゃなくて良かったと思ったら、ディリトア王国は金貨と銀貨とな。
うーん、あっちに飛ばされなくて良かった、色々メンドイ。
とりあえず1獲＝1円の感覚でいいようです。
つまり物価も日本と同じくらい。
うん、レジ打ちのバイトすらしたことないからちょっと不安だけど、バリバリ計算しますよ！

仕事するに当たり、職場(ギルド)の上層階に住んでるカイゼさんと一緒に住むか？と聞かれましたが、快世お義兄様のお母様に拒否られまし

た。

「雅葉は私と一緒にご飯を食べるから駄目です！」

意味不（イミフ）です、お母様。

えーっとどうやら二人きりじゃないそうですよ？

それでも駄目らしい。

どんだけ娘欲しかったのか、と。

そういえば『おかあさま』と呼べと強制されてます。

後で『おかあさま』に呼び出され、娘を手元にとかじゃないのよと、とある要注意人物について聞かされました。

カイゼさんの幼馴染で副ギルドマスター『御堂香優（ミドウコウユウ）』様、

貴族の女性、２４歳の独身、お母様曰く、カイゼに気があるハズ！

だそうな。

い、いじめられるのはいやだなぁ……。

とりあえず職場には魔法列車に乗って通うことになりました。

定期券的なものもあるし、うーん、ＯＬになった気分というかなるのだけど。

毎日、専用の魔送車（魔法移送車の略で自動車みたいなもの）での送り迎えは超必死でお断りしました。

逆にそっちで行ったほうがお姉さまのイジメが怖いと思うんです。

太刀花家の忍者モドキ（！）が護衛してくれるそうなので大丈夫、大丈夫。

ってか忍びの者がいるって……主な仕事は諜報と護衛だそうです。

忍者って律儀に定期券買って護ってくれるのかな……。

そういえばいつの間にか私に戸籍を作ってくれたらしく、太刀花家当主の妻の養女クドウワカバという娘の存在が私だそうです。何故、タチバナやイトウではなく、クドウかというと、この国完全夫婦別姓らしくて、太刀花家当主の妻の氏は紅堂(クドウ)なんだそうだ。つまり、私は戸籍上、紅堂雅葉として一生生きることになるのです。夫婦間の子供は事前にどっちかの氏に統一しなきゃいけないとのこと。

養子は夫婦両方とは養子縁組出来ない、養子は養親の氏を名乗ること、だって。

学校で習わないのと特に興味が無かった所為か日本の法律は良く知らないけど、戸籍ってそんな簡単にできるもんなのかなぁ？

勝手に作ってゴメンサイとは言われましたが、昔ニュースで見た無戸籍って就職とか面倒らしいという情報が脳内に残っており、生活しずらそうなので素直に感謝しました。

『タチバナより馴染めそうですし、ありがとう、お養母(かあ)様』と答えておきました。

そのあともの凄い抱(ハグ)きつきが待ってたけどね。

娘はあなたの愛で死んじゃいます、お養母様。

【9】　勉強は楽しいな！【後編】（後書き）

４／９改稿。

雅葉は快世ママと結婚しろ……的な。

ある意味養女は結婚したことに……ゲフンゲフン。

【10】　神様は何してる？【前編】

ココで言う異世界トリップとは、自身の存在する世界（空間）とは別の世界（空間）に何らかの力によって瞬時に移動させられる事象、と説明させてもらう。

つまり、雅葉の飛ばされたブエルノ帝国が存在する世界は、地球が存在する空間とは異なるところに存在している。
それゆえドラゴンがいたりするなど全く異なる生態系を持っていたり、音声言語や文字言語が全く違うのが大半なのだが、同じような姿形である人間という存在が有ること、貴字と漢字など偶然にも同じ存在が有る場合もある。
更にはその人間に信仰される神もまた違う。

地球では愛の女神がギリシャ神話で例にするとアフロディーテ（英名ヴィーナス）と呼ばれるが、（注：アフロディーテは美も司っているというため、正確には愛単体の神としてはエロースの方なのだが、知名度でアフロディーテを採用させていただいた。）この世界ではペクテーヌと呼ばれている神様が愛を司っている。
ココでは管轄する場所が異なるだけで愛の神自体が複数いると考えて欲しい。

さて、此方にお二人のお美しい神々がいらっしゃる。
愛の女神「ペクテーヌ」様と、彼女の若いツバメ（女神本人は超否

定）である戦いの神「チョジェ」様であらせられる。
この男神は戦神（いくさがみ）なのにもかかわらず、愛の女神であるペクテーヌより美神（びしん）（単に異常なまでの女顔）でありながら、ペクテーヌと恋仲と言い張って付きまとっているストーカー兼戦神だ。
とりあえず悲劇的ではある。
自分より美しい男に言い寄られる……うん、作者としては全然ＯＫなのだが皆さんはどうだろう？
ともかく彼は美しすぎた。
その彼が愛しの女神に声を掛けていたのである。
此処は何処か？というと、彼女の住まいである。

「おーい、ペクテーヌ～。聞いてくれよ～」

「嫌じゃ」

彼女はいつもどおり勝手に這入（はい）って来た男に振り向きもせず断りの言葉を投げる。

「あ～、うん……にべも無いなぁ～。オレもさ、日本人の女子高生をブエルノ帝国に落っことしてきたから、アドバイスしてくれよ」

「……は？」

彼女が振り向いて聞き返した。
戦神は一気に機嫌を良くした。

「オレも真似して異世界トリップさせちゃった～♪」

「何のためにじゃ？」

「んー車に轢かれて死んじゃう運命だったけど、勉強頑張ってたし、まだ若いのに可哀想かなって？マンガ５冊と交換してきた」

聞けばこの男神、たまたま日本でマンガを買おうとしたところ（神様が？）、なかなか凄惨な事故現場を目撃してしまい、魂の抜けかかったというか既に魂を刈り取るために日本担当の死天使が待機していた、車に轢かれてほぼ即死状態の通学途中の地球産日本人女子高生をたまたまコンビニで買った成人向け雑誌５冊（そもそも何故買った）と交換してもらい、見た目は同じだけど新しい身体だけを作り出して、異世界の大国ブエルノ帝国にトリップさせてしまったという。

ちなみに死天使とは死神の配下の天使である。

死神とは死を司どる神のことだ。

ちなみにこのチョジェ、腐っても戦神のため、モチロンまともに戦えば死天使より強いのであって、態々雑誌と交換しなくても力ずくで横から人間の魂の一つや二つ掻っ攫うことは可能である。

交換したこととトリップさせた理由としては、お相手（死天使・男性）の「そ、その持っていらっしゃる雑誌は…（赤面）」という好奇心（？）に気付いたからと、「自分もやってみたかったんだよねぇ、だってマンガみたいじゃん！」とのこと、彼はまだ一度もトリップをさせたことがないのであった。

だが、そもそも自身の存在自体がマンガのようなことに是非気付いて欲しい。

「ブエルノ帝国の誰のために落したのじゃ？それともあの娘に帝国で何かしてもらいたいのか？」

釈然としないが彼女はそんな言い分を黙って聞いてやってから、問うてみた。

ペクテーヌ自身、異世界トリップ＝異世界召喚には独自ルールを決

めていたからだ。
基本的に神様達の人間に対する【軽〜い悪戯】は自由なのだが、直接命を失うような行為は神様方の倫理的に禁止されている。
【召喚】行為は召喚されたモノ側が命がけの場合があるため、制約付きで許可されており、彼女は輪をかけて召喚ぶモノを選別している。
彼女は特に【自身を崇めるディリトア王国の中でも特に願いの強いモノの為】にしか召喚しないと決めていた。
だって、自分を慕ってくれるのがやっぱり一番可愛いし、あそこ基本平和だし。
ちなみに彼女自身が【召喚ってされたヤツ命がけだよね、ちょっとある程度規制しとかないと可哀想でない？】ルールの発案者ではない。
ルール発案者はどこか別空間担当の神様方だった。
そもそも大雑把なルールが出来たのは、趣味が異世界召喚の神様がいて、最初の頃はえげつない最期を遂げるモノが多かった所為だった。
闇雲に召喚したものだから、その土地になじめず孤独に生きたモノや、一時は勇者と崇められたが結局迫害され、命を失ったモノも居た。
流石にその神様も死んだモノ、数百を見て、無闇に召喚してはいけないと気づいたらしい……というわけにもならず（！）、好き勝手さらした後、主に慈愛を謳う神様達の告発で全神様行為規制連合会の非難により、お前のえげつない召喚中止！となったそうなのだ。
結局ルール創りをすることになり、ソレは他神も同様に了解し、【理由のない異世界召喚はしない。また、被召喚者を死亡するまで観察すること、神自身の力を使って被召喚者を故意に死亡させることは禁止とする。】
つまり、あれこれこういうために必要な人材を召喚します、呼びたくて呼んだので責任持って面倒見ます、不要になっても勝手には殺

しません。ということである。
ただし、罰則があるわけではない。
しかしながら、ソレは今の今まで守られていた。

【10】　神様は何してる？【前編】（後書き）

４／９改稿

チョジェ様は残念なイケメン……むしろ見た目美女。

【11】　神様は何してる？【中編】

「うん、ソレを今から考えようとしたんだ、ペクと一緒に！」

戦神（いくさがみ）チョジェが雅葉を召喚する前までは。

「ア、アホかーっ！何も考えておらんだとっ？！」

「うん。ペクと考えたかったんだもんっ♪」

この男神（アホ）、何も考えちゃいなかったと言うのだ。

しかも悪びれず。

「だもんっ♪じゃ無いぞーっ！異世界召喚のルールは何じゃっ！」

「んー理由のない異世界トリップ……召喚はさせない、勝手に殺さない？だけど問題ないよ、ペクが居るし。誰かと恋仲にさせちゃえばいいじゃん、ちょうど第一皇子が女に興味ない軍事マニアだし～。雅葉にはそれとなく皇子がいるんだぜって言っといたんだＺＥ☆」

しかも愛の女神との会話欲しさに召喚理由を後付しようとしていたのである。

「だＺＥ☆　とかもうキモッ！　お前ホントにキモッ！　いいか、

よく聞くのじゃ。わらわの力で誰かと恋仲には出来ぬぞ、召喚神の能力しか対象者は受け付けぬ」

「え、マジ？　そんなの聞いてない。オレ、泣く子も黙る戦神なんだけど？」

どちらかと言うと、泣く子も見惚れる……である。

「言っておったぞ、第６４９５３９４会議で決定したのじゃ。【被召喚者が受けられる加護は召喚者の能力のみ】とな。理由は明快じゃ、『他人の尻拭いなんぞ面倒くさいから』じゃ。お前は何してたか知らんが。つまり、雅葉には戦うことに関してしかサポートしてやれんということじゃっ！」

どんだけ会議してんだよ、神様たちというか、会議の開催回まで暗記してるのかよ、女神様よ！である。

「う、確かその回はペクが真横だった！　うん、ペクを終始見つめてたな」

おそらくペクテーヌ限定で隣に座っている神まで覚えているらしい。

「その回のわらわの左隣はグオムじゃった。右にはお前が居たかも知れぬな。だがわらわはグオムも貴様も見つめておらんぞ、ちゃんと会議は聞いていた」

余談だが、グオムは死神で、更にペクテーヌの夫である。

二神（ふたり）の間には子供も授かっており、三天使（さんにん）（愛天使２と死天使１）居る。

「フフフ、どうしよう……戦いって……ｏｒｚ」

チョジェは美しい顔を下に向け、途方に暮れた。
理由は馬鹿馬鹿しいが、容姿の所為で非常に絵になる憂い顔。

阿呆な戦神を放って、女神が二神の間に大きな鏡を持ってきた。
人間など地上の様子を観察するときに使用する魔法の大鏡だ。

「庭になぞ落としおって……喋れんので双方とも困惑しとるではないかっ！異世界トリップの王道、音声言語理解とやらはどうしたのじゃ？」

女神は落とされた少女を魔法の大鏡で見つめながら戦神を詰る。
雅葉の現在状況は庭先で目覚めたものの、相手の使用音声言語が理解できず、コミュニケーションが取れないため非常に困っているところである。（要は【2】参照）

「あ～あ……忘れました☆」

音声言語理解とは要は相手の言ってることが判ることである。
理解の仕方もさまざまで、最初から音声言語が理解できるようになっていたり、自動的に被召喚者の脳内で日本語訳が浮かんだり、聞こえる音声に脳内で補正がかかる為、相手の口の動かし方が違って見えるなど比較的バラエティに富んだ王道パターンと言える。

「忘れました☆じゃなかろうがーっ！この阿呆め！脳筋めっ！地獄に落ちろっ！！！」

「ソコまで言わなくても……大丈夫だよ、雅葉頭いいし」

「だったら貴字……漢字に気付かせてやるんじゃっ！さっさとせんか馬鹿神っ！」

「馬鹿神……いや、どこを、どうすればいいのかさっぱり……？？？」

とペクテーヌがチョジェをどついている間に、雅葉は樹木三兄弟の根元の立て札に気付いた。

「ん？漢字に気づいたようじゃな」

「大丈夫だった～良かった～。ペク記念にデートしようよ」

「誰がするかーっ！貴様は雅葉をずっと見張っていろっ！マンガ買いになんぞ行くなよっ！」

バキィッと良い音を立てて愛の女神の拳は戦神のボディにめり込んだ。

「ゥグッ！」

かなりの痛みとともにうずくまるチョジェ。

だが苦悶に歪むはずのその顔は少し嬉しそうだった。

愛は盲目否ノー痛覚、もはや末期である。

【11】　神様は何してる？【中編】（後書き）

４／９改稿につき、神大騒ぎ編も前中後編となりました。

【12】　神様は何してる？【後編】

この物語より１０００年ほど昔の話をしよう。
５つの国の植民地だった大陸民が一丸となって独立戦争に勝利し、もっとも戦功の高かった深剣氏を初代皇帝とし、ブエルノ帝国を建国した。
だが、１７０年ほど前に、俺強ェェェ！し、また勝つぜ！逆に植民地作ったるで！と調子に乗っちゃったブエルノ帝国は、魔術大国ディリトア王国率いる連合国軍にあっさり負けた。
とりあえず帝国民はこんな阿呆神（ヤツ）を信仰しおって阿呆じゃ、とペクテーヌは心底思っている。
それでも信仰が廃れないのは男神であるにもかかわらず、人間に神々の中で一番美しい女神だと思われてるその美貌故である。
ペクテーヌ自身も大層な美神なのである。
銀の腰まである巻き毛に豊満な身体、豪華絢爛という言葉がぴったりなのだ。
愛の女神にふさわしく微笑めば周りに大量の華麗な花が咲きほころぶ。
（ついでに動物と戦神（アホ）が発情する。）
だがそれをも軽く凌駕するのが、腰まで流れる乱れ無き金の髪、蜂蜜のごとき金の瞳、霞に溶けるような儚げな風貌……そんな可憐な美貌の持ち主がその『戦神』なのである。
「わらわより美しい男とデートなぞ誰がするか……ふ、ムカつくからまた殴ってきてやるわ！」

ただただ報われない戦神であった。
……いや、構って貰えて喜んでいるかもしれない。

「仕方ない。ディリトアの宮廷魔術師を新婚旅行に帝国に寄越すかの……何ぞ良い方向性を見つけてくれるやも知れぬ。今からじゃと何時頃(いつごろ)になるかのう……そういえば最近グオムと旅行に「嫌だー！オレを殴りつけるときに他の男の話をするなー！」

夫と旅行に行ってないと呟こうとしたら戦神が大声を張り上げた。
派手に嫉妬している。

「ウルサイ、雅葉を召喚した理由がないとか他のヤツらに言うなよ」

女神様、口調変わってます、ハイ。

「あぁっ！俺達だけの秘密って響き……素敵！！！」

「もぅヤダ、コイツ……キモイし……ウザイし……ストーカーだし……雅葉とやら強く生きるんだぞ……何、戦神の加護がある。コヤツが本気になれば無駄にチート機能付加で色々と勝てるハズじゃ……む、わらわの愛するディリトア王国には勝てぬがのっ！魔動力は無いが何、その辺の男と交わって絞り取ればよいのじゃ！それにしても何故(なにゆえ)太刀花家に落としたのじゃ？」

呟いている事柄でかなり重要事項があるがそこはあえてスルーである。
どうせ雅葉には伝わらない。

「ふぅ、愛が痛いぜ……太刀花家？いや、一応俺戦神だし？やっぱ

武道派な男の元に愛を！と思ってさっ！」

うん、皇子様と恋仲案はどうした？
言ってることとやってることが本当にむちゃくちゃである。
そしてさっきから相当ボッコボコにやられているのだが、全くノーダメージな戦神（ストーカー）である。

「いや、フラグ立ちそうにないぞ？立ったとしても庭師の息子じゃないか？」

「あれ～？おかしいなぁ？　三男坊独身だぜ？　そういえばマンガ買いなおしたけど、ちょっと主人公ペクに似てて、もう大興奮しちゃった」

そして恋仲作戦あっさり放棄して、エロ本の女が好きな女に似ていて大興奮と発言する男が一神（ひとり）……大変残念なカミサマであった。

「キモい」

会話の最中にはドゴッ、ガハッ！、ズダッ、グフッ…、ガツンッ、ゲハッ！……という攻撃音とうめき声が混じっている。
戦神というより生きたサンドバッグである（ペクテーヌ限定の）。
今のところ新しい身体をあげた以外に何にもしてない戦神。
何のかかわりも無い雅葉にも優しい愛の女神（というかチョジェ以外には）。
神に愛されているのか見放されているのか……さて、雅葉の運命は如何に……？

【12】　神様は何してる？【後編】（後書き）

４／９改稿により、神様大騒ぎいったん終了。
神様はたまに後書きと毎章の終わりに出てくる予定です☆

【13】　若き魔術師の悩み【閑話】

絶対下っ端新米宮廷魔術師である私になど皇家の家紋入りの依頼書なんて見る機会がないと思った。
それがどっこい、そんな機会は入庁7ヶ月目にしてあっさりやってきた。

上司がやったらもったいぶってその家紋入りの依頼書を机上に出して、お前が一番向いてる仕事だったと言った。
正直、太刀花家から直接皇帝を経由しての身元調査依頼書の中身の詳細を見るまで、否、見た後も、依頼書を私に渡した相手である上司に向かって、この上司何言ってんだ？と思っていた。

「新米の君に任せるのはこちらも忍びないが、これは君が一番適任だろう。太刀花家の達（たち）ての希望で若い女性が良いそうだからね。謹んで受け賜るように。判らないことがあったら何でも聞きなさい、みんな喜んで協力してくれるだろうからね。いいかい、少しの不明点でも判らなかった時は必ず協力を仰ぎなさい。決して独自の判断で結論を出すんじゃないよ？」

要はみんなと協力してやりなさいってことだ。
魔術師って基本個人プレーが好きだから普通そんなこと言われる機会はない。

「ハ、ハイ……」

ちなみに依頼書が皇帝経由なのは理由がモチロンある。

貴族は大概お抱え魔術師がいて大概はそいつらに任せる。
お抱えだけではにっちもさっちも行かなくなったら国一番のエリート集団である宮廷魔術庁に頼る。
宮廷魔術庁に勤める宮廷魔術師は所謂皇室お抱え魔術師なので皇家の依頼だけ聞いていればよい。
だから皇家以外からの人間がどうしても宮廷魔術師にすがりたい時は皇家経由になる。
つまり皇家の人間なら誰でもいいけどそれが直接皇帝経由っつーのが……まぁ稀なわけで。
そのエリートではあるが入庁7ヶ月の新米である私は初めて見……拝見した。

皇帝経由で四大貴族からの調査依頼を私が調査主担当って嘘でしょ？
皇家の家紋である二振りの細剣（さいけん）と麒麟（きりん）、太刀花家の家紋の一振りの太刀と朱雀（すざく）がついた仰々しい依頼書を恐る恐る読み始める。

身元調査依頼書

氏名：自称イトウ　ワカバ　貴字：伊藤　雅葉
年齢：自称１７歳
職業：自称ガクセイ　貴字：学生
（地域の子女が集まって高等教育を学習する所に通っているとのこと）
住所：自称ニホンコクチバケンイチカワシヤワタ１チョウメ１バン１ゴウヤワタマンション７０７ゴウ
貴字：日本国千葉県市川市八幡一丁目一番一号八幡高層住居用建築物７０７号

容貌：黒髪黒目、前髪も後ろ髪も長く、後ろでまとめて縄のように編み束ねている。
潜在魔動力を計測するも0と表示された。

・・・（略）・・・

～～～調査経緯～～～

太刀花家本邸の庭にて倒れているところを庭師の親子に発見される。

・・・（略）・・・

以上により、計測器の反応によって偽りを述べておらず、身元不明の妄言者（せいしんしょうがいしゃ）である可能性が高いと思われたため、身元判明調査を依頼したい。
なお、客間にて行った聞き取り調書及び計測結果書は別添の通りである。
また、ニホン国についての大まかな地形図及び政治制度等を証言している・・・略・・・ニホン国のある異世界の存在（可能性）の調査及びニホン国があればその帰還方法に関する調査を依頼したい。
ただし、身柄は太刀花家本邸にて保護、養育しているため、引渡しが出来ない旨了承願いたい。

「なにこれ……え？……異世界人……？」

とりあえず最初の一枚目は両家の家紋と赤で庁外極秘と書かれているだけなので2枚目をひとまず読んだ。

たった一枚の全て読み終えるのに読み返すところがあったためか少々時間がかかった。

「ちなみに身元引渡し拒否の理由はなぁ……太刀花家の正妻様がその娘を気に入ってしまったようで、実の娘のように毎日着せ替えしたり、礼儀作法を教えたり……人体実験なんぞしたら……うん、怖いから言わないでおくぞ」

上司である魔術師庁長には特に気にしてないところを突っ込まれた。ソコは別に気にしてなかったですとは言えまい。
観察対象は拘束地で軟禁状態か。
身体検査がしたいときには現地に行くしかないのかな？

「えっと……庁長……これ……本当に私がやるんですか？」

前途多難ってこういうときのための言葉にあるんだなぁと私は実感した。

「だってお前くらいしかいなかったんだもん……」

（だもん……じゃねーよ、このおっさん！）

確かにこの１７歳という年齢と女性という性別にもっとも近い宮廷魔術師なら今のところ私しかいない。
なぜなら私が１７歳で、かつ性別が女性だからだ。
一応１７歳前後の魔術師ならあと３人ほどいるが全員男性である。

「とりあえずあれだ、身体に異常がないとこちらの環境に適応してるのか調べるって書いてすぐ送ってやれ……爪とか髪の伸び具合とか」

上司からすぐにアドバイスが飛んできた。
まだ依頼書を持っていまいち実感がつかめずぼうっとしている私を苦笑しながら見ている。

「あ、ハイ。……あ、そっか！一年が３６５日とか短すぎですもんね……約二ヶ月と半月で1年なんて……うーん……同い年の女の子かぁ……でもコッチで言ったら3年5ヶ月か……うっそ3歳児？……えぇ～？それで高等教育受けるって何なのこの世界？」

爪と髪の伸び具合でその世界に居たかどうかなんぞすぐ判るだろうってこと。
爪は大体一週間（１２日）で１ｍｍ伸びるから一番調べやすそうだ。
交通事故後の身体にしては傷が一切ないというのも今のところ妄言者である証拠のひとつ。
ただ、太刀花家の庭への進入経路及び警備システムが故障をしていないにもかかわらず全く作動していないことと、『自動車』なる土の精霊の恵みによる油を力として動く乗り物には興味を引かれたが、『電車』という風の精霊の怒りによる力で動く乗り物とやらには呆れるばかりだ。
精霊を怒らせてどうする、怒らせて……。

「そう言われると生き急いどる世界じゃな……寿命は約８０年ということじゃから、ココでは１７歳くらいじゃろう？もうお前さんは死んでいてもおかしくない婆さんということか……」

「いやいや。そういう庁長はこの世界だったら化け物扱いされる御歳ですよ、ってか化け物ですね」

「お前の給料下げられないのが残念だ」

「この『サラリーマン』とやらでなくて私もほっとしていますよっ！」

サラリーマンとは、依頼書内の証言にあった異世界の職業の中のひとつである。
説明から読み取るに上司に歯向かうと給料を減らされるという職業らしい。
売り言葉に買い言葉ってやつである。
ちなみにこの庁長は私の伯父、正確には母の兄である。
職場で二人きりでいるときには大概こんな感じだ。

「まぁ、そういうことだ……落ち着いて取り組みなさい。お前には……いや、全宮廷魔術師にとって良い経験になる。まぁ、庁外には極秘じゃから……国内外のヤツらに応援は頼めんぞ」

国外と聞いてすぐある魔術師の存在が思い浮かんだ。

「国外……異世界人の存在が本当だとしたら……発覚したらディリトアのヤツらが喜んで押しかけてきそうですね……特にあの愛女神ペクテーヌの寵児とか」

「あぁ、イシュライラ・キールンか。しかし二つ名って誰が考えるんじゃろうなぁ……」

（まず何よりもこのおっさんの脳内を調査してやりたいわ……）

「まぁ、頻繁にありすぎてディリトアに異世界人がいるのは当たり前というオチもあるかもしれんがな」

うわぁ、その線もありえるなぁ。
平均魔動力がそもそも高いのは異世界人のお陰とか？
「あ、そういえばディリトアの最近のブームは、異世界召喚によって恋愛する小噺らしいですよ……」
なんでも神様の悪戯で異世界に旅立った女主人公が男をとっかえひっかえする話らしい。
要は悪女じゃん、その女。
そんなんが好きなのかディリトア国民？
最終的には王子をたぶらかして時期国王の正妃の座に収まる異世界ととっかえひっかえを除けば玉の輿話だ。
男をとっかえひっかえは何のためにあるんだよ？
最初ッから王子狙っていけば良いじゃんか。
「なんじゃそれ？美味いのか？」
（小噺っつってるだろーが。食いモンじゃねーよ、ジジィ）
ってよく考えるとかなり異世界という感覚に違和感ないな、ディリトア。
異世界人だったら本気でディリトアに頼らざるを得なくなるかもしれないなぁ。
「まぁよろしく頼むぞ」
「ハイ……皆さんのお力もお借りするでしょうけど、やってみます」

恭しく挨拶を交わしてから、魔動文章送信術（イーメール）を使用して、太刀花家に世話になっているワカバとやら宛に爪や髪の伸び具合はどうかと聞くために、私は庁内の自室へ移動した。
最初の一文から何を書けば良いのか判らなくて先輩方に泣きついたのは言うまでもなかったりする。
社交性ないんだよな、魔術師って。
いや、私が皆無すぎるんだろうけど。

（あーあ、それにしてもせっかく大きな仕事なのにこんな極秘任務じゃ日記に書けないなぁ……今日の日記は文通相手が出来ました、その子の名前は雅葉ちゃんといいます……同い年の女の子です……よし、コレでいこう……いや、やっぱダメだな……）

勘違いというか贅沢（？）な苦悩を抱える若き魔術師であった。

【13】　若き魔術師の悩み【閑話】（後書き）

チョジェ「頑張れ、若人(わこうど)よ！」
ペク「いや、お前が諸悪の根源じゃぞ……」

後書きに神様のコントな出番を作ってみた。
そしてワカバの住所は某市川市役所の所在地です（何が某？）。
マンションは高層住居用建築物と無理やり説明させてみた。
ちなみにこの彼女、名前はまだ無い。
　４／９改稿と一緒に入庁３ヶ月を７ヶ月に修正。
行き急ぐを生き急ぐに修正。
何処行くつもりだったのだろう、冥土か？
あと実は７月という設定と入社は４月じゃなくて１月なんだぜ！が
活かされていないと言う痛恨のミス。
そのうち暦年や何日かは明らかにいたします。

　リーマン説明を追加。
どんな説明をしたんだ、ワカバさんよ。

【14】　私の綺麗な親友様【前編・閑話】

親友の名は伊藤雅葉（いとう　わかば）、出席番号2番、成績はいつもトップ。

私の名は緑川若葉（みどりかわ　わかば）、出席番号22番、成績は……秘密。

思えば彼女との出会いは即ち私の一目惚れというヤツである。

うほっ、美人発見！

こんな綺麗な子と同じクラスなんて嬉しいなぁ……って頭も良いのかよ、天は二物を与えてしまったんだね。

良いよ、良いよ、こんな綺麗なら……体育が苦手だったらオールオッケーだよ……ホントに苦手だった！　萌え神様偉い！　というテンションを一応最初の頃は隠しつつ、自分の苦手な数学をネタに彼女に話しかけまくっていた。

彼女は嫌がることもせず、丁寧に回答の導き方を教えてくれた。

彼女とは漢字は違えど名前の読み方が同じだったから運良く仲良くなることも出来て、知り合った頃からずっと名前の読み方が同じモンだから名字で呼び合っていた。

ただ、私が基本的に話しかけるばかりだから、もしかしたら彼女は友人とさえ思っていないかもしれない。

それでも私は彼女が好きだ（勿論友人として）から一方的にでも無視される日まで話しかけることにしていた。

ちなみに伊藤ちゃんは私を代表（？）とする腐女子グループとつるんでいる事が多い。

腐るように洗脳したが失敗した現実主義者（リアリスト）さんだ。

そんな世界（ＢＬ）があることを理解はするが興味は無い。
そんなところがまた萌えるじゃないのぉぉぉぉ！
彼女は身長も結構あるので今私がハマってるライトノベルの男装キャラのコスプレとかして欲しいのだがその辺はスルーされてる。
まぁ、相方の身分を隠した王子様役がいないからいいけど。
ってか王子様やってくれないかな。
不肖ながらこの身長１５３ｃｍの私が男装するわ。
身長差に萌えるぜ。
一応洗脳の甲斐があってかお嫁さんが欲しいと言ったこともあり、バリバリのキャリアウーマンになると私たちは確信してたから、私は正妻、彼女の美貌にヤられた数人が愛人と名乗っている。
彼女のことは陰で雅姫（みやびひめ）と呼んでいる。
名は体を表すという諺どおりの子だから。
ってか要は彼女の美貌にみんなメロメロ（死語）なのである。
彼女は雑誌の読者モデルをやれそうなスタイルのせいなのか、腐女子以外の女子、クラスのギャル系やおしゃれ系にも話しかけられる。
そして彼女の化粧っ気のない顔にギャルメイクされて弄ばれる……。
やめんかぁぁぁ！！！　綺麗な子は化粧しなくたって綺麗なんだよぉぉぉっ！！！
本人は知っているのか知らないのか、多分知らないな……彼女は人気者だ。
本人は一匹狼でも気にしない性質なのか、彼女から話しかけることは少ない。
彼女曰く、学校は勉強するところであって必ずしも友人製造機構ではない。
ソレがクラスメイト含む周りの人間には何故か萌えるわけで。
計算か、計算なのかぁぁっぁ！
ってか彼女にとって逆ハー……かこれ？
なんか違くね？
とりあえず彼女は自覚なき女子高の王子様もとい、お姫様だ。

よくイジメの対象とかにならなかったな、感心するわ。

親友の不幸を聞いた時、クラスではＨＲの時間だった。
暗い顔して入ってきた担任は生徒の顔を見回し、とある席を注視して悲しそうな顔をしてから飲み込めない情報を口にした。

「……今朝、伊藤が交通事故で亡くなった。お通夜は明日午後６時から市営公共斎場で行う……ご両親は無理しなくていいとは言っていたが、仲良かった者は是非行ってやって欲しい」

「！？」

ドヤドヤとクラス内に衝撃が走る。
欠席していたのは事故に遭ったからか。
メールを送ったのに返信が来なかったのは死んでしまったからか……。

翌日の新聞を見て事件のあらましを知った。
登校中の伊藤ちゃんと携帯電話で作業をしていたらしい女性の車がアクセルとブレーキを踏み間違えたのか猛スピードでぶつかり、伊藤ちゃんはほぼ即死……。
轢いた相手も逃げようとしたのか衝突後にスピード緩めずに走り、電柱に激突……打ち所が悪くてこちらも即死という。
やりきれなかった。
親友の命を奪った恨むべき相手まで死んでいたのだ。
担任から聞いた夜はぐるぐると考え込んで眠れなかったが、翌日お

通夜に出た後は疲れもあってか涙を浮かべながら眠った。
次の日からは何事もなかったかのようにと言えば御幣があるが、伊藤ちゃんに話しかけられないという点を除けば普段どおりに生活できた。
なぜなら、泣きながら眠った夢の中で、私は彼女が別世界でまだ生きているところを見たからだ。

【14】　私の綺麗な親友様【前編・閑話】（後書き）

しんみりと地球側のお話です。
親友の緑川ちゃん主役。
ってしんみり……してないね、この子。

【15】　私の綺麗な親友様【後編・閑話】

親友が事故死してから、私は断片的な夢を見るようになった。
無意識下がなせる業ではあるが、ついに私に異世界トリップネタを提供してくれるライトノベル（通称ラノベ）の神が降りてきたのかとも思った。
主人公が死んだ友人というのがなんとも皮肉なわけだが。

夢の中で事故った親友が異世界トリップしてイケメンに拾われて、処刑とかされることもなく、そのイケメンと語学学習に励み（羨ましいがな）、イケメン母の薦める花嫁修業を放棄して、乙女が夢見る王子様との結婚フラグを見事叩き折っていた。
最近の夢はイケメン母に溺愛されて何か違う道辿るんじゃねーの、この子ってな感じになっていた。
お前、誰と結婚するんだよ、イケメン母とか？
異世界トリップ＝結婚って熱い演説しすぎたから、反抗する気か？

夢に出てくる異世界トリップの主人公が彼女なのは、彼女のその美貌、品行方正な性格、鈍感さというお約束の主人公像として私のちょっと足りない脳味噌が捉えているからなんだろうと思っていた。
ココ2，3ヶ月毎日見ているのでは毎朝眼が覚めて直ぐに、忘れないようにとメモを取ってから学校に行った。
そんな結婚フラグ叩き壊す主人公じゃ話のネタになんねーよと思いつつ……私はこれが本当だったら良いなと思っていた。
彼女はきっと異世界でのほほんと勉強しながら生きてる。

　親友の四十九日の法要後、書き溜めたメモを元に私は将来の夢に向けて新しいラノベを執筆することにした。
四十九日の法要は来世の行き先が決まるらしいとｗｉｋｉ先生に習ったが、彼女は死んでいないから来世などまだ関係ないのだ。
彼女の別世界での１７歳の続きを私は書き綴る。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１章

　主人公は事故に遭って、死ぬ直前に神様に会いました。
何の神様かは主人公に明かしませんでしたが、神様は主人公に生きたいか？　と聞きました。
主人公は生きたい！　と答えました。
神様は死神と交渉してエロ本５冊と交換で主人公を異世界に送り込みました。
主人公はイケメンに拾われました。
イケメンは金持ちの貴族で行くところがないのならウチに住めば良いと言ってくれました。
主人公はエロ本５冊と交換されたとも知らず、いまのところイケメンと楽しく勉強しながら生きています。
主人公は何のために異世界に来たのか解っていませんが、ソレもそのはず、意味なんてなかったのです。
主人公は好きに生きて良いのです。

王子様と結婚しても良いし、魔法使いになっても良いし、男装して騎士を目指しても良いんです。
でも主人公は馬鹿じゃないので自分の能力を理解していました。
彼女は保護してくれたイケメンと一緒に働くと決めたのです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あれ？これじゃイケメンがハーレム展開じゃん、これ？」

パソコンの前で私は悩んでいた。
メモが尽きたのでこれ以上の展開に悩んでいるのだ。
イケメンには幼馴染の結婚秒読みの許嫁がいる設定だ。

「イケメンフラグも良いけどイイ人オーラ出しまくりなんだよなぁ。お兄ちゃんなんだよなぁ……成年誌向けなら実はドSで伊藤ちゃんが調教されるってオチが……やべっ涎出てきた。ダメだぞイケメンめ、私の嫁に何てことを。いえいえダメなのは私の脳内……」

とある条例に引っかかりそうなことを考えつつ、否定する。
私が今書いてるのは乙女向けライトノベルだ。
そんなヤラシイ展開はご法度である。

「ってかこれタイトル何にしよう……」

伊藤ちゃんハーレム計画……事故って異世界トリップ……？

「いいや、後で考えよ。第一章は異世界２４時でいいや。救急医療とか警察的な？」

そのうちタイトルをつける神様が降りてくることを信じ、私はカタカタと続きを入力していった。

「第二章で絶対王子様とフラグ立ててやる。首洗って待ってろよ、伊藤ちゃん！」

その後の夢で私の野望は打ち砕かれ、親友は生真面目になんらかの仕事をこなしていた。

頑ナニ恋愛フラグ拒否スルノデスネ……酷いよ。

「次こそはっ！首洗って待ってろ！第三章……目指せ王子様と結婚フラグッ！」

次の夢こそ逆ハー、結婚や恋愛フラグを見るぞと、私は咆(ほ)えた。

勿論、第二章のごとく彼女は生真面目に仕事をしていた。

せめて貴族設定生かしてお城の侍女とかになれよ、もう……乙女が書類と格闘なんて……うん、売れないな、このラノベ。

とりあえず第一章のお勉強をしているところまで完成したら、不謹慎かもしれないが伊藤ちゃんのお父さんとお母さんに読んでもらおうと思っている。

それと夢の話をするのだ。

イトウワカバは死んでいない、と。

怒られること覚悟で言うぞ。

死んでないんだ、私の綺麗な親友様は、と。
あぁ、ソレまでにタイトルを考え付かないと……。

【15】　私の綺麗な親友様【後編・閑話】（後書き）

若さのなせる業というか……うん。
伊藤さんは元気ですよ。
ペク「何というか、エロ本だけ正確じゃな……」
チョジェ「何故ソコだけ正確なんだろう……？」

【16】　学生は卒業！

この世界に小学校から高校、大学（院）、専門学校というとにかく学校という存在は無い。
正確には神学校とやらがあるが、庶民の子供が教会で必要最低限の読み書き算数を習うだけ。
教えているのは神父やシスターで、教師として給料をもらっているわけではない。
貴族の子女は専属家庭教師（カテキョ）がマンツーマン指導とのこと。

今更ですが、通学中事故に遭って、制服を着ていての異世界トリップという偉業（？）を成し遂げた私は、偶然か日本での通学鞄も一緒に手に持っていた。
今後出番がなさそうな携帯電話を資料として宮廷魔術師に預け、国語用のノートの表紙にブエルノ学習帳（昔小学生の時使っていた有名なノートの名称をパクッった）と書いて習ったことをメモしていた。

携帯電話は勿論のこと、このノート、教科書や文房具類も見せたら案の定かなり驚かれ、とくにシャープペンシルとボールペンに甚く感動された。
異世界について調査している宮廷魔術師に参考資料として貸して欲しいと言われたのでどちらも一本づつ貸した。
シャーペンもボールペンも3本以上ペンケースに入ってるから問題ない。

ココの筆記具は羽ペン。
一応慣れるため使ってはいるんですが使いづらいことこの上ない……。

「このシャーペンとか金物の職人さんが量産なんてできませんかね？」

「確かにソレは便利そうだからな。ちょっと頼んでみよう。貸してくれるか？」

隣で私に歴史を教える教師役の快世お義兄様（にいさま）にダメ元で言ってみたり。
ついでに頭についてる消しゴムの大型版も開発させてくださいと付け加えてみたり。
ちなみに貴族のお抱えカテキョに頼まないのは無論私が異世界人だから。
地球の常識と違うトコロとか変なこと口走るからね、私。
案の定、消しゴムの存在無いようだし。

「ん？あぁ、コッチの白いので擦ると消えるのか。一々精霊に頼まなくて良いのか」

消すのは精霊（多分、水なんじゃないかな）の仕事だったのかぁ。
凄いな、魔法。

「この辺も精霊さんは消してくれるんですか？」

シャーペンの書き跡とノートの表紙の油性ペンで書いた国語という文字を指差して聞いてみる。

「ん、どっちも消してくれると思うぞ。頼むか？」

「是非」

「よし、じゃぁ……ティアルク・ト・オリエッテ」

呪文を唱えるのとほぼ同時に書き跡と国語の文字が消えた。
呪文を和訳すると「お願い精霊さん、この文字消してよ」という意味です。
まんまやんけ。
呪文は古代語らしくて、帝国のとある宮廷魔術師が絶賛解明中とのこと。
中々研究が捗（はかど）らないらしい。
でも魔法良いなぁ……これ使えたらテスト中みんなティアルクティアルクって五月蝿いんだろうなぁって違うか……。
でも消すのは呪文唱えたほうが早いから消しゴムは今んとこ魔法が使えない私専用ってことだね。

私が異世界で働こうと思ったのは学校という存在自体がないからというのと、日本の「働かざるもの食うべからず」という諺の所為。
最初は勿論大貴族な太刀花家バンザイでした。
労働せず勉強だけしてますという生活を送れていた。
ただ、語学がほぼネイティブ並になったた私はそろそろお勉強の中身も尽きたと言うか。
自慢じゃないですが飲み込みが早いので、あと覚えるとしたら専門知識になってしまうわけでして。
学者と言う道もいいですけどね……魔法使えないとなぁ……。
まぁ、お養母様曰く、貴族の娘は花嫁修業か家に居て微笑むのがお

仕事よ♪だそうで。
いや、人生甘えちゃいかんですよ、いかんですぞ。
いつ何があるかわかりませんから必要最低限の貯えを用意しますよ、自力で！
っていうか微笑むコトが出来ないので外に出て働きます、お養母様。
まぁ、正直花嫁修業がイヤだったのもあるけどね！
というかそもそも修行させても誰かと結婚させる気あるのかな？
ライトノベルで普通、異世界トリップして貴族の養女になってからって、次の展開はどうなるだろう？
何かしら恋愛イベントがあってフラグが立って、最終的には皇子様との結婚が待ってるのかな。
相手が皇子様だと気づかないとかも多いパターンだよね。
って私ってば花嫁修業をすると皇子様と結婚フラグ立ったのか？
よかった叩き折ってて。
どうせ結婚するならその辺の職人とかのほうが良いと思うけどねぇ。
庭師、金物細工師とか……そういえば庭師の息子さんには親切にしていただきましたわ。
花とか木々を愛でるお人だけあって爽やかな性格だったと思います。
というか恋愛フラグなしで異世界人と結婚て……普通ないから大丈夫かぁ……？
いっそ緑川ちゃんもラノベ持って異世界トリップして来てくれないかな。

そんなわけで手に職をつけようかと、快世お義兄様の経営するギルド、『ハレルヤ』（意味は不明なのだが、冒険の神のありがたいお言葉のひとつ……らしい）というまさしくファンタジーな職場で私は働くことにした。
お義兄様たちに働きたいと言ったたものの、どんな仕事がしたいか

については魔動力が無いというだけでいまいち使えない自分には何も思い浮かばなかった。
だって皿洗いにも魔動力が必要である。
水の精霊に魔動力を引き渡さないと仕事手伝ってくれないんだって！
ので私がやると時間がかかりすぎて恐らく直ぐに首になるでしょうと。
とりあえず義兄様方にどんな仕事をしているのかと、どの部分に魔動力を使うのか聞いたみたのだ。
そしてカイゼ義兄様の仕事内容を聞いた時、ファンタジー世界の産物であるギルドに経理事務があるんですね！　と感動してしまったのがきっかけだ。
長兄の晴緋お義兄様が働く銀行という存在があるんだからそりゃ経理事務もあるだろう。
それからは「じゃぁウチで働くか？」となって「ハイ！」と元気よく返事をして、今日に至る。
え？　計算するのに魔法使わないのかって？
ソコは何故か使わない。
精霊さんは頭使うような作業は手伝ってくれません、残念っ！
電卓が鞄の中に入ってれば良かったなぁ。
携帯に入ってるけど電池切れたらお終いだもんなぁ……。

【16】　学生は卒業！（後書き）

本編ひさびさかな？
これで第1章終了です。

チョジェ「いえーい、雅葉に結婚フラグ叩き折られちゃった♪」
ペ　ク　「喜んでる場合か？」
チョジェ「どうしよう……ｏｒｚ」
ペ　ク　「知らぬ、存ぜぬ」
チョジェ「ってことで、第二章　異世界逆ハーレム２４時！　をよろしく！」
ペ　ク　「そんなサブタイついとらんかったわ」
チョジェ「じゃ、第二章　パンを銜えて街角でぶつかったあの人は皇子様？！　をよろしく！」
ペ　ク　「そんな皇子は嫌じゃ」
チョジェ「え、パンを銜えるのは雅葉だぜ？」
ペ　ク　「解りづらいわ……」
チョジェ「じゃ、気を取り直して第二章　政略結婚だよ、全員集合！　をよろしく！」
ペ　ク　「……サブタイ編集の能力を作者にくれてやりたい」
チョジェ「あ、うん。ソレは俺も思った」

【17】　通勤は魔法列車で！

とうとう初出勤日が近づいてきました。
異世界にて仕事に就くに当たっての通勤手段といえば基本は無し（住み込み）又は徒歩か馬車だろうが、ココではちょっと違う。
列車である。
だが、そこはファンタジーという名の魔法が存在する異世界がなせる業、魔法列車なるもので通勤である。
いや、ファンタジー世界でワザワザ働く私も私だが、通勤する異世界人って私が初めてじゃなかろうか。
普通住み込みとかだからね、お城に住まわせてもらってて侍女仕事とか。
ご都合主義めっ、そうはいかんぞ！
緑川ちゃんだったら「ご都合主義？　愛してるっ！」って言いそうだが。
そもそも何のために異世界来ちゃったのか良くわかんないし。
要は魔法が電気代わりの異世界な訳で少しは気が楽ですと〆ておこう。
あれ、めちゃめちゃご都合主義じゃね？
でもご都合主義だったら私もバンバン魔法使えてるはずだな、ちっ。
異世界といえば中世ヨーロッパ＋魔法とドラゴンのようなイメージだったけど、此処はアラビアンだし、馬とかその辺に走ってないし、ドラゴンに乗って空中移動とか魔獣討伐はあるけど私がやる訳では無いようなので……まぁ、キリキリ働くか。

あ、魔法列車に地球というか日本のような通勤ラッシュはないらしい。
理由はソコまで人口が多くないから。
勉強中に教えてもらった地理情報によると、帝国の領土面積自体は約９４０平方キロメートルと日本（約３８万）の約２５倍、地球で言うとアメリカや中国並みの大きさであるのに対し、全人口は１，０００万人程度だそうなのだ……うーん、少なすぎる。
何故そんなことが判るのかと言うと、魔法で調べたのではなく、帝国は日本で言うところの国勢調査（こくせいちょうさ）を地味に行っているというのである。
そういうのは魔法でちょちょいと調べられないのか？　と聞くと、出来ないこともないが、かなりの魔動力が必要で、個人の魔術師に依頼するのは無理とのこと。
では宮廷魔術師はどうかと言うと皇室からの依頼で無いと動かないというのだ。
国家の中枢（皇城＝皇居＋国会議事堂）にいるくせに国政に関心がないように見えるが、その実、皇室のお抱えなので皇室の言う事だけ聞いていればあとはフリーダム。
つまり、魔動力をかき集めて勝手に調べることを努力するより、郵便で各世帯に調査票を送って回答待ちのほうが早く事務処理が終わる。
ちなみに宮廷魔術師の給料は皇室持ちですか？と言ったら、彼ら宮廷と名は付くが、皇室＝税金から給料が出ているわけではないとのこと。
では霞でも食べているのか？（それは仙人です、ワカバさん）と聞くと、各個人の研究成果に対する特許料で生活しているとのこと。
ちなみに太刀花家始めどこのお抱え魔術師もそんなモンらしい。
難しいぞ、ファンタジー！

ただ、城内や屋敷内の魔術結界を張っている人には報酬があるので税金や貴族が報酬を出すとのこと。
ちなみに魔法結界の役割とは不審者と魔物の進入阻止である。
太刀花家への侵入者である私には全く作用していなかったため、その辺も調べさせているらしい。
そういえば自分不審者だった。

おっと話が脱線してしまったので、通勤の話に戻ろう。
魔法列車の乗り方は、地球の電車のソレと変わらない。
定期券を改札の黒い石＝魔動石（まどうせき）の表面部分にかざして読み込ませる。
魔動石とは魔動力が内臓された石である。
見た目はオニキスと思ってよい。
定期券にも薄型魔動石（要はＩＣチップ）が内蔵されていて、あらかじめ登録しておいた通勤者情報を読み込むのである。
要は改札でス△カを使うのと同じ、お金を使用する場合は切符を買う。
ビバ魔法列車、首都圏在住だった現代人にはありがたい。
原動力が風の精霊さんの魔（動）力とかファンタジー設定過ぎるけど。
ってかこのシステムを利用すれば私も魔法を使えるようになる気がするな……。
今度お抱え魔術師とやらに研究してもらおう。

しかし、こんなにこき使われて精霊って反逆しないのかと思えば、感謝してれば大丈夫とのことだった。
いいの？　精霊（あんたたち）さんそんなんでいいの？
すっごい、感謝してます、ありがとう精霊さん。
私はコレを聞いてから精霊さんを神と崇めることに決めたよ。

将来の夢、前は何となく文集とか医者って書いていたけど、今は断然、精霊様を崇める会の教祖になりたいわ。

あ、経理係から教祖にジョブチェンジは今更ダメですかね、お義兄様？

【17】　通勤は魔法列車で！（後書き）

第2章です。
よろしくお願いします。

チョジェ「第二章　パンを銜えて街角でぶつかったあの人は皇子様？！　じゃないだと？！」
ペ　ク　「なんだかんだで気に入ったのか……ソレ」

通勤通学と言えばパンを銜えて……です。
発想貧困で申し訳ない。
明日から便器に住もうと思います。

チョジェ「あ、俺もペクの家の便器に住むわ」
ペ　ク　「神様は大も小もしません」
チョジェ「そうだった……」

【18】　魔法列車でお喋り！

帝国暦１０１１年７月１２０日　午前８時

さて、初出社のために今日から魔法列車に乗る。
初出社……正直、緊張する。
中学受験より緊張してる。
お養母様（かあさま）に辛かったらいつでも帰って来ていいのよ！　と言われたが、ソレは嫁入りした娘が実家を出て行く時に言う台詞の気がします。
……うん、ちょっと気が楽になったかもしれない。

さて、本日だけは快世お義兄様、もとい社長であるギルドマスターと一緒に通勤。
座席とつり革まである電車と見た目変化の無い魔法列車内で、二人仲良く座ってギルド近くの駅に着くまでお喋りをする。

「そうだ、今日の昼食はどうする？　職場の目の前の店に出前を頼むか？」

「ハイ。お兄様……マスターはいつも出前なんですか？」

「おし、じゃぁ出前決定。出前だったり、冒険者や職員達と食いに

行ったり、色々だ」

色気も減ったくれも無い会話を続けていくと、ちらちらっと女性方がお兄様を盗み見しているのが判った。
普段この時間帯にそもそも乗らない客層なので珍しいのと、やっぱりカッコいい人だから、だと思う。
客層というか基本的に大貴族だから身に着けている物のレベルが違うのと、自動車モドキの魔送車や、高値で取引されてる動物が運ぶ獣車があるので、中級貴族以上になると魔法列車なんぞ乗らないのだ。
そういう物を判別できる人間＋女性がどうやら視線を送ってるらしい。
どこかに護衛の忍者さんも乗ってるとは思うけどバレる様な視線の送り方はしないはず。

「時速６０から７０ｋｍくらいですかねぇ……」

車窓から見える景色の変わり方が山手線よりちょい速いくらいかなと、時速１００ｋｍは出してないだろうなと考えた程度からの発言だ。

「ん～正直乗ったことが無いから正確な時速は知らないな。そういや長さの単位は違和感無く聞いていたようだが、ニホンと同じのようだな」

「メートル法ですよね、日本と同じです……ずっと伺いたいと思ってたんですが、私は身長１６５ｃｍですけど、マスターは１９０ｃｍ以上ありますよね？」

太刀花家はみな高身長である。

長兄ハルヒお義兄様や、お養母様の夫であるご当主様も１９０近いし、女性の、私より頭半分位高い上背のお養母様も１８０近くあるだろう。

「ん、俺は１９５だったかな。まぁ、そこそこ高い？かな。まだしばらくは逢えねぇけど青空（アソラ）は２ｍ越えだぞ」

「２ｍですか……うーん私の世界じゃ球技選手に引っ張りだこですね。皮製の中が空洞になってる丸い球を高い位置にある籠に入れて点を取り合う競技があって、背の高い人が重宝されるんですよ」

背の高いと言えばバスケ競技の選手と思い、私はお兄様に球技の存在を伝えた。

「へぇ……楽しそうだな、今度その球と籠を庭に作ってみるか」

「一人でも二人でも適度に遊べますし、いいかもしれませんね」

どうやら興味を引いたようで自分でやってみたくなったのか、バスケットボールとゴールを作り出す気のようだ。

「よし、じゃぁギルド経由で皮張りと籠造りの職人を用意して作らせるか」

「本格的ですね……？　もしかしてお兄様方と対戦する気ですか？」

「ソレも楽しそうだな。まずルール確認と称して雅葉と軽く汗を流そうじゃないか」

「あ、私そんなにルールとか詳しくないです、ワザの名前とかも知

らないし」

というか、私はバスケはおろか球技全般にさほど興味が無いので、細かいルールどころか大雑把なルールさえあやふやである。

「ワザ？　必殺技があるのか？」

必殺技を求めるのは異世界でも男の性なのか……お義兄様がより食いついてきた。

「えーと必殺技というほど大層なものじゃないんですけど、その籠には鉄の輪がついてまして、球をソコに直接手で叩きつけるのがスラムダンクと言って、豪快な音を立てて得点を入れるので人気がある得点方法なんです」

緑川ちゃんが貸してくれるマンガ知識がまたこんなところで披露されてしまった。

勿論ワザ名と同じタイトルのマンガですよ～。

列車内の会話によって、快世お義兄様が庭でバスケを始めたところ、晴緋お義兄様と青空お義兄様を巻き込み、太刀花三兄弟の新しい趣味として貴族に広まった……。

それから数年後、帝国内ではバスケがブームになり、流行語が「バスケがしたいです」になりました……。

なんてことにはならないよな、まさか。

そんなことをつらつら妄想していたら３０分程度で職場近くの駅で降りた。
そして駅から徒歩３分の位置にあるハレルヤに二人で仲良く到着。

大概ギルドは何処も同じ造りらしく、２４時間対応に備えるため、上層階に住居圏を設けている。
現在住んでいるのは快世マスターと例の要注意人物えある香優副マスターと受付嬢４名、事務員３名とのこと。
冒険者が宿屋代わりに使用するってのは防犯の都合上と宿屋の業務妨害になるので普段は出来無い。

午前９時に一緒に働くことになる事務職メンバーに挨拶するために、１階の受付２人には先に軽く挨拶を済ませ、事務室がある２階で挨拶をするからと言われ、マスターと３階へ上がった。
メンバーが集まるまで３階のマスター室で一旦待機することに。

「うー……緊張します……」

「全く緊張しないよりは好ましい。ふてぶてしい新人なんて扱いづらいしな」

マスターがそう言い、軽く笑う。
最初からギルドマスター＝社長なんてやってる所為で新人の扱い方を心得ている。
緊張は悪いことじゃないようだ。
よし、お茶汲みでも新人イビリでも何でも来い！
受けて立ってやろうじゃないか！
……あ、やっぱイビリは無しで。
あと数分で私は事務職員の新人として紹介される。

【18】　魔法列車でお喋り！（後書き）

魔法列車の乗り心地は電車と変わりませぬ。
ってことでほのぼの通勤タイム。

【19】　自己紹介をしようかい！

「今日から経理担当として雇った紅堂雅葉(クドウワカバ)だ、みんな面倒見てやってくれ」

「よろしくお願いします」

2階にある事務員達の執務部屋、事務室で自己紹介され、日本人である私は深々と頭を下げて挨拶をした。
移民国家の帝国では、お辞儀だろうがハグだろうがチューだろうが一々驚かないので楽である。

「紅堂って、快世のお母様のご親戚ってこと？」

私が頭を上げた瞬間、とある人と眼があった。
おう、なんだかゴージャスな美女がいらっしゃいました。
睨まれているわけじゃないけど偉そうです、マスターを呼び捨てだし、貴族に違いない。
よもや、お養母様の言っていた危険人物か？

「そうだ。オレの母方の遠縁で、事情があってこっちに来たんだ。母のお気に入りなもんだから、母が一緒に住むと聞かなくてな。コイツは上に寝泊りしないで実家(ウチ)に帰るからその辺ヨロシク。何で働くことになったかの経緯はよくわからん」

と適当に紹介をされた。
よくわからんってアレほど庶民感覚である私が労働をして得る金の価値の大切さを説いたんだが……貴族に理解させるには根本的に無理なのか？
確かに成り行きで貴族の娘（養女）になってしまったのでお金には困らない。
しかも貴族の娘の労働は基本皇城か大貴族の屋敷の侍女仕事くらいらしい。
庶民は大概１５，６から本格的に働き始めると聞いてしまったからには……日本人の性なのでしょうか、お養母様が薦めてきた皇城の侍女仕事（貴人の世話）よりはこちら（事務）のほうが気が楽そうなので。
所詮ワタクシは日本の一庶民です。
というか魔法使うような仕事が出来ません……。

「そう、よろしくね。私は御堂香優（ミドウコウユウ）、副ギルドマスターをしているわ」

やっぱりか。
お養母様、早速危険人物とやらに発見されました……。
いや、しかし、ゴージャスな美女だなぁ。
容貌は一房だけ顔にかかってる赤い髪でストレート、濃い緑の瞳に、肌が褐色。
帝国はアラビア風衣装なので髪色を除けばアラビアンナイトに出てくるような美女でございます。

「よ、よろしくお願いします」

美女の迫力にどもりつつ、また深々とお辞儀をする。
お辞儀って目を合わせないから良いな！

「よろしくおねがします～。受付のキムラ　トウファです～。今日は休みだったけど出てきちゃった～」

「よろしくおねがします。受付のキムラ　イファです。トウファの妹です」

「でも～、イファはドジですから気をつけて～。私はドジじゃないけど～」

「なっ！　私はドジじゃないわ！　姉様っ！」

そして受付嬢のキムラ姉妹。

恐らく２０歳よりは下、同い年程度か……間延び毒舌が姉で、しっかりした感じだがドジッ子のが妹……可愛い系の茶髪で黒目、日本人っぽい名字と容姿で仲良くなれるかな？

可愛い萌姉妹が受付か～、ハレルヤ良い物件揃えてるねぇ～。

「事務員その一のハン　ワンです。この姉妹はウルサイので一々突っ込むと疲れますので無視して差し支えない感じ？」

事務員の女性、名前的に中国系だがスレンダーで流れる水色の髪（！）、眼は濃灰色の知的美人、年齢２０代後半から３０代前半（？）です。

ノリが良さそうで話しかけ易そうな方です。

「え？　事務員その二のムラタ　ジローです。気軽にジローとお呼びくださいませ、お嬢様！」

男性で２０代後半くらいかな？　アクセがチャラくてラップとか好

きそうですっ。
そして肌色が茶で黒眼、黒い髪の毛がチリチリで……人種がネグロイドのようです。
ワンさんのノリに着いていこうと、むしろ勝とうと頑張ってるようです。
お嬢様って……ジローさんは執事ポジションですか？
クロ執事……。

「じゃぁ事務員その三のカラル　ケントです。ワカバさんいくつ？
まだ若いよね？　お茶飲む？」

男性で２０代前半（？）のやったら色白でくせっ毛の濃い目のピンク色……眼は茶色。
ニコニコ笑ってて可愛いお兄さんです、第一印象はウサギ！　……人種的はコーカソイドなのかな？
人種とか肌の色なんてもう関係ないような世界だからどうでもいいや。
この世界は髪がピンクとか水色とか普通にいるのです。
脱色とか染色はよっぽどのことじゃない限りしないそうな。
更に帝国は元植民地なだけに人種のるつぼなので、私はそんなに目立たない。
これだけ色々、まさしくカラフルにいるので、帝国では私個人になんら違和感は無い。
というかピンクとか水色の髪って……なってみたい気もする……。

「え、あ、１７です。えっといただきます。ありがとうございます」

「今居るのは以上だな。２４人が三交代で２４時間回してるから、後は適当に会えたら自己紹介するってことで。机はここな？」

どうやら今現在では私と快世さんを除くと６名。
現在午前９時３０分、１日２４時間というのは地球と同じなので気が楽である。
ただ、秒の概念は無かった……さして問題も無かろうが。

「ハイ。そっか２４時間営業でしたね……」

「ワカバの勤務時間は午前９時から午後６時まで。実労働時間８時間、昼食と休憩時間に計２時間。慣れるまで適度に休んでやってていいから」

「ハイ」

「あと、これが雅葉のハンコ」

ほら、と渡されたのは日本でもおなじみのアレ。
宅配の受け取りにすら最近は使わないアレである。

「ハンコ……？」

紅堂雅葉とフルネームで彫られた印鑑を受け取ってしげしげと眺める。

「あぁ、帝国はハンコ文化なんだよ。決裁するとき書類にハンコ押すんだ。あ、ニホンにはないのか？使い方教えたほうがいいか？」

「あ、日本もハンコ文化だったので、大丈夫です」

あくまでも‘だったので’だが。
今や仕事でハンコを使う所って、銀行と役所くらい……あれ？　で

も電子ハンコなんてものがあるからまだまだ現役なのか？
とりあえず私から説明は不要である旨の返事を聞くと、マスターは事務室を出て１階に下っていった。
なんでも普段は１階の受付近くで冒険者たちと会話したり、３階のマスター室で事務決裁の仕事をしているそうだ。

【19】　自己紹介をしようかい！（後書き）

うん、何も言わないで。

緑　川「サブタイが寒いね」
ワカバ「おおっ、緑川ちゃんが降臨された！　ってか言っちゃった！」
緑　川「おっす、伊藤ちゃん。元気してた？」
ワカバ「うん、元気。緑川ちゃんは？」
緑　川「アンタの葬式のあとアンタが夢に出たときからは元気」
ワカバ「うわぁ～コメントしづらいことを」
緑　川「フフフ。結婚フラグ叩き折った腹いせよ」
ワカバ「……ソ、ソレばかりは努力できませんっ」

【２０】　初仕事はお喋り……アレ？

マスターが退室してからは、ワンさんに席に座りなさいと言われて、私は自分の席と言われた場所に移動して座った。
ワンさんは何十枚もの書類を持っている。
どうやら私に直接指導するのはワンさんらしい。
私は下っ端事務員としてみんなの補佐、将来的に経理事務主担当として働けばいいとのこと。
座ってほぼ同時にケントさんがお茶を持ってきてくれた。
ついでにコレ来客用のカップだから後でマイカップ用意してね、とのこと。
お養母様に頂いたお小遣いで買ってこなきゃ。

「ということで早速昨日の収支報告書がココに。賃借対照表とか損益計算書の見方は判るの？」

賃借対照表が企業の財政状態の報告書。
損益計算書が企業の一定期間の経営成績。
経理の専門用語はあらかじめハルヒお義兄様が優しく教えてくれた。

「ハイ」

「習うより慣れろで実務からバリバリいくわよと言っても今はとりあえずこの束を片付けるだけだけど」

「よろしくお願いします！」

収支報告書には件名と依頼者及び遂行者の氏名、遂行者とウチの報酬額が書いてある。

ウチの儲けは依頼料の３割、つまり７割が遂行者側の報酬という説明がワンさんの口からなされた。

「今更だけどウチは結構有名なギルドだからね、ガンガン高額報告書が挙がるわよ」

「頑張ります！」

つまり庭掃除を１０，０００獲（トル）でやってくれっていう依頼は、７，０００獲が遂行者へ、３，０００獲がギルドの儲けだ。

実際この程度の依頼は市営や国営ギルドが担当する。

ウチで担当する依頼の基準は依頼料３００，０００獲以上とのこと。

基準は依頼料なので庭掃除３００，０００獲以上なら扱うのだそうな。

まぁ、そんな額出すのに釣り合う庭は大概貴族か大商人のお屋敷のだだっ広い庭園だ。

ちなみに魔獣討伐なんてＲＰＧ世界な依頼も勿論あるわけで。

コレも依頼料は同じ基準の３００，０００獲以上。

そして遂行者が数ＰＴ（パーティー）の場合、報酬は各自協議で決める。

そこも基準があって、３００，０００獲の庭掃除を３ＰＴ計１０人でやったら、事前に報酬一人２１，０００獲と決めるのが大半らしい。

そして９０，０００獲がハレルヤの取り分……以外にしょぼいなと思ったりして。

要は割り勘ならぬ割り報酬である。

揉めてもギルドは絶対関与しない。

ちなみに依頼料は依頼主が勝手に決められるけど相場ってものがあるから相場からかなり低いと受けてもらえないのでご注意を。

「うん、頑張れ！　と言っても夕方に一番書類が溜まるから。とりあえず午前中やることは先日分の報告書を記帳することね。あとギルドの備品に対する修繕費とかもあるから、そういうのと依頼報告書は仕分ける様になりますっと、早速修繕費の伝票が来てたはずだからこの書類の束から引っこ抜いてみようか」

１ｃｍほどの厚さになっていた書類にパラパラと目を通すと、中から報告書とは全く様式が異なる紙が紛れ込んでいた。
伝票にはイスシュウゼンヒと民字で今一読みづらいおじちゃんが書いたような字で書いてあった。

「ハイ……コレが修繕費ですか？」

「うん、正解です！　ご褒美にお茶飲んでいいわよ。ちなみにコレこないだ冒険者が１階でスッ転んだ所為で壊したのよ～」

「へぇ～」

話を深く突っ込んで聞きたい……。
転んだだけで何故椅子が壊れるのかを。

「ワン主任、お茶がご褒美って……まぁいいや。ちなみに壊れたのはその冒険者の武器の戦闘斧が当たった所為だよーん」

お茶を置いてからずっと私たちを観察をしていたケントさんが横から乗り出して話し始めた。

どうやら彼はお喋り好きのようだ。
まぁ馴れ馴れしいが壊れた訳を聞いてみたかったのでよしとする。

「戦闘斧……凄いですね……」

「斧って見た目的にあんま人気ないけどさ、あの男の顔は結構イケてたよ。ウチのお得意様で独身の参級冒険者なんだけどさ～。……いやオレほどイケてはないけど」

ん？　ルックスと武器が比例しない冒険者と言いたいのだろうか？
日本じゃ可憐な細腕の女子キャラが戦闘斧や槍振り回すようなゲームがあったりしたし、特に気にはならないけど。
というか……この人本気で女好きキャラのようだなぁ……。
日本のナンパしてくる男の子みたいな雰囲気垂れ流してますがな。
ケントさんは自分で言っちゃってるけど、正直それなりにカッコいいので日本の女の子はホイホイ着いていきそう。

「はぁ……カッコいい冒険者ですか……」

なんと答えていいかよくわからないので濁しておいたら、ワン主任が楽しそうに問いかけてきた。

「あれ？　冒険者に興味なし？」

興味？
無いといえば嘘になるけど。

「まぁ、太刀花家は武器がそこら辺に飾られていますし……冒険者は興味無いといえば嘘になりますけど」

太刀花家、武人な家柄だけに装飾用の武器の飾られ方が半端なかった。
一部屋にひとつ、武器が何らかの形で飾られていた。
私の部屋には華美な装飾を施された短剣が大きな花瓶に埋め込まれて飾られている。
護身用ですと言われたが使えないよ、埋め込まれてちゃ。
魔法で出せるそうだが、なんというか……魔法が使えないって切なす……。
チートの神様、私も魔法扱えるようにしてください。
武器の扱いも出来ないし、魔法が使えない自分としては冒険者は憧れの対象だ。
身一つで金を稼げるっていいよね。

「……まぁ……そうか……マスターの家だもんなぁ……（イイ男なんて）より取り見取りだよな」

何か悟ったような口ぶりでケントさんは、お茶飲んでよねと私に声を掛けると、お茶のカップを乗せていたお盆を片付けに行った。
色々何かを語りたかったようだ。
武器マニアとかだったのかな？
ソレは失礼なことをした。

【２０】　初仕事はお喋り……アレ？（後書き）

チョジェ「うーん……」
ペ　ク　「何を考えておる、チートの神様」
チョジェ「いやぁどのタイミングで逆ハーレム展開にさせようかと」
ペ　ク　「わらわは手を出さんぞ」
チョジェ「デスヨネー……雅葉は一生魔法使えそうに無いなぁ……」
ペ　ク　「わらわが悪いみたいに言うなっ！」

【２１】　飲み会は１５になってから！

さて、あっという間に１時間が過ぎ、２時間が過ぎ。
ちまりちまりと書類を整理しながら事務室でワンさん達とお喋りに興じ、書類を弄る以外に仕事らしいことはあまりしていない……アレ？
ワンさん達に聞いたら元々事務員足りてるからねぇ……とな。
ギルマスってば私を雇ったのは完全に慈善事業だったのね……。
今月の給料貰えるか心配になってきた。

そして一言も喋らないジローさんと香優副マスター。
どっちも見かけのチャラさとは裏腹におとなしい人なのか？
っつかジローさん外見ラップ系なのに中身は大和撫子…撫男ですかい？
副マスも外見ド派手なネーちゃんですが中身淑女なのか。
おとなし過ぎて逆に怖い……。

気を取り直して……日本と同じ（？）で新人歓迎会の飲み会をやるらしくて勿論私が主役ってことで出席する方向でまとまりまった。
飲み会なんて初めてだからホント楽しみ。
飲酒自体は実はしたことがある、自宅で……あとチョコレートによく入ってるし。
帝国には未成年飲酒禁止という法律があるにはあるが、未成年が１５歳未満なので私は余裕でお酒飲めるのだ。
うっふっふ、ホント楽しみ。

やっぱ自分の限界は知っとかないとね。

あとキムラ姉妹が私のマイカップ探しを手伝ってくれるとのことで、一緒にお買い物に行く計画も着々と進んでおります。
ケントさんがついていくかいかないかでキムラ姉妹と揉めに揉めた。
キムラ姉妹と不肖この私と、ケントさんで行動。
あぁ、ハーレム築きたいだけですね、わかります、わかります。

「ソレ、私も行っていいかしら？」

そんなケントさんはつれて行かないお買い物計画を練り進めていくうちに、挨拶以降は終始無言だった副マスが初めて声を上げる。

「え？　香優様も一緒行きたいんですかぁ～？」

キムラ姉であるトウファさんが意外そうに聞き返す。
香優様と呼ばれているのか。
ふむ、副マスターとは呼ばれないのね……。
副マスター二人居るって言ってたからなのかな。

「えぇ、あなた達だけじゃ心配だもの」

副マスターはいつの間にか私の真後ろで仁王立ち。
立ってから歩くまでの気配はいずこへ？！
ドドーンと迫力あるお貌（かお）でこちらを見ております。
座りっ放しの私も立ったほうがいいかな……。

「確かに危険な任務ですが、私達だけで遂行可能と判断しました！」

ビッ！　と直立不動になって上官に報告する形を取るイファさん。

いや、別に何も危険じゃないよ、キムラ妹のイファさんよ。
買い物だけなのに、大げさな。
ってか何なの、そのノリ？！

「何故、危険な任務……」

私が戸惑い気味で聞くと、私の席の周りを囲んでいた内の一人、ワンさんが心底面白そうに回答してくれました。

「ナンパ師を軽くあしらうこと」

「あぁ……」

なんだ、そんなことか。
街中に魔獣でも居るのかと思ったよ。

「マスターの義妹（いもうと）様はこのトウファがナンパ師からお守りいたします～」

トウファさんの間延びする声で騎士宣言。迫力無いぜ。
うーん、このノリは非常に謎だ。さすが異世界？

「えーと……守られるほど街中のナンパとは凄いものなのでしょうか……？」

無理やり引っ張られて変なトコに連れ込まれちゃうとか？

「いや、うーん何と言うか……雅葉が百選練磨の冒険者の口車に乗せられないか心配で、心配で」

ワンさんが苦笑を洩らしつつ理由を話してくれた。
何だろう、もしかして箱入りのお嬢様と思われてる？
「別に私庶民なんで大丈夫ですよ？」
「紅堂家のどこが庶民なのよ……やっぱり心配だから着いていくわ」
「あぅ……」
香優様にハッキリ物申され、異世界では庶民の存在でしたとは言えず……。
マイカップ購入メンバーはキムラ姉妹とコウユウ様と私の四人のようです。
どうやら完全に箱入り娘と思われてるようですな。
もしかして護衛付きですかとトウファさんが香優様に問いかけると、当たり前でしょうと答える。
護衛って……忍者さんのことか？
「太刀花家の密偵さんなら多分その辺にも居ますから大丈夫ですよ？」
「ホントに付けてるんだ。その人カッコいい？」
イファさんが食いついてきた。
密偵＝イケメンＳＰと思ってますか？
「え？　……密偵さんは女性ですよ？」
実は私に付いてる密偵さんは山畑（やまはたけ）さんと言う女性です。
火編がなければ日本でもメジャーな名字でして、座布団と幸せ運ん

だりとか。
この国では山畑はメジャーな名字らしいです。
密偵といえば、つい、シルバーソウルの密偵を思い出してしまった。
山畑さんの……あの顔から比べると、某山崎君は随分垢抜けた顔してると思う。
山畑さんホントに何処にいるのか、はたまたこの部屋にはいないのか全然わかんない……。

「じゃ、早速今日仕事帰りに行きましょう〜。善は急げなの〜」

「えぇ、早いほうがいいわね。夕食は近くで食べることにしましょう。あとで快世に連絡しておけばいいわよね」

「ハイ！　夕食は香優様の奢りでしょうかっ？！」

イファさんが嬉しそうに尋ねる。

「えぇ、そのつもりよ」

至極当たり前という感じで香優様も返答し、トウファさんののんびりとした声から買い物する日が今日となった。
しかも四人で夕食まで一緒に取ることに……。
それにしても仲良いなぁ。
社会人ってこんなノリで仕事していかないと駄目なのか……。
が、頑張ろうっと。
そして最後までジローさん無言だった……って逆に凄いんだが。

【２１】　飲み会は１５になってから！（後書き）

飲み会大好きなのは作者です。
モツ鍋食いたい（今更）

【22】　初めての共同作業！

と言う事でグダグダとほぼ喋ってばっかりのまま業務終了の時刻に。
全然仕事してないというかイメージのキャリアウーマン雅葉の出番は何処……。
こんな筈じゃなかったんだけどなぁ……。
いや、初日だし、職場の人たちに慣れるって大事だよね！　と気を取り直して皆でマイカップを買いに行く事にした。
向かう先は職場近くに店を開いている食器工房。
トウファ&イファ姉妹情報によるとその職人さんのお弟子さんが良い男なんだとな。
何だ、イケメンウォッチングしたいだけか……。
私ってば出(だ)しに使われただけか……、コギャルな同級生方を思い出すわ。
まぁ、別にいいけど。

入り口のドアを開けると客の来訪を知らせるカランという音が鳴った。
地球では電気だったり、風鈴とか風圧を使って鳴る物だったりしたけれど、此処ではモチロン魔法ちゃんが大活躍。
音の精霊さんてのがいて、その子が家主の好きな音で知らせてくれるらしい。
精霊さんええ子や……惚れてまうやろーっ！　ですな。

欧米みたく怪しいもんじゃありませんよという事で店内にいた従業員（多分この人がお弟子さんとやら）にこんにちわと挨拶をしてから店内の商品を物色する。
で、入店１０秒？　早速香優様が動物のイラストが入ったマグカップに釘付け。
……え、何かブサカワイイ物見つめてるんですけど？　意外な好みです。
姉妹はナチュラルにイケメン弟子に話しかけていて私のマイカップ選ぶ気全く無し。
えぇ、自分で選びますけどね！
と考えはしたものの……中々コレ！　と思う作品に出会えない。

「気に入ったものが見つかりませんか？」

イケメン弟子が話しかけてきた。
いつの間に姉妹のラブアタック（？）を掻い潜ったんだろうか。
とりあえず無視するわけにもいかないので正直に答えてみた。

「あ、えっと……私、実家で湯のみという持ち手が無い食器を使っていたので、似たようなものがあれば……ソレにしたいと思ったんですが」

太刀花家でも緑茶を出されたときは取っ手付きのコーヒーカップに注がれていた。
しかも砂糖をお入れしますか？　という質問付きである。
欧米で売ってるペットボトルの緑茶は甘いらしいが、まさかこんな異世界（ところ）で、砂糖入り緑茶に出会うとは思わなかった。
というか緑茶の存在はあったのに、緑茶を飲むための湯のみ茶碗がどうやら帝国には存在しないのか、店内の飲用茶器はすべて取っ手が付いているものであった。

「持ち手が無いですか……聞いた事はあるけど式典用とか……在庫があるかをちょっと師匠に聞いてみますね。こちらに掛けてお待ちください」

ハイと返事をして店内の角にあった椅子にちょんと腰掛けた。
植物製のスツール……なんかちょっと癒される。
そういえばイケメン狙いの姉妹はというとコウユウ様と一緒に先ほどのブサカワ動物マグにヤイヤイ言っていた。
私は地球にあって、帝国にない物（あのブサカワ動物とか）とかぐるぐる考えて待っていると、のそり……という擬音がぴったりの店主兼食器職人がやってきた。

「いらっしゃいませ、お嬢様。持ち手が無い湯のみをお探しとお伺いしましたが間違いないでしょうか？」

「あっ、はい。あれば……ですけど……こちらでは作られていないのですか？」

「持ち手の無い湯のみは神式の儀式用等では需要があるのですが、庶民向けなどでは使いやすさに重点が置かれますのであまり生産しても売れませんでして。一応奥に仕舞ってあったものですが、私が昔作った物をお持ちしました」

近くのテーブルに3点の持ち手が無い飲用茶器（湯のみ）を並べられる。
色彩はやったら派手派手しいがまさしく湯のみである。
その中でもアイボリーを下地とした朱色と紺色が華やかな市松模様の湯のみに惹かれ、手に取った。
店主が出てきた所為かコウユウ様と姉妹も私の近くに来て湯のみを

見ていた。

「わぁ可愛いです～」

「……良いじゃないの」

「お洒落ね」

三者三様の言葉で私のマイカップ候補を誉めそやす。
これにしようかなと私は店主を見てコレが欲しいんですがいくらですか？　と問うた。

「あ、はい……古いものですので５００獲です。今３点買っていただきますとまとめて１，０００獲で結構です」

「３点まとめて１，０００円……いや、獲か」

「トウファはそっちのストライプが欲しいです～」

トウファが気に入ったのはアイボリー地に細い濃茶と太い桃色の縦ストライプ柄の湯のみ。
なんとなくトウファのイメージとぴったりである。

「じゃぁ私も残り物には福があるって事で濃緑色のヤツ欲しい」

イファのセレクトは濃緑の下地がおそらく上薬でつやつやと輝いている上品な一品。
実態はドジッ子（らしい）イファの表面（容貌）だけを見て取ればお似合いの一品である。

「じゃぁ決まりね、１，０００獲で３点買うわ」

そう香優様が言うと代金をサッと店主に支払ってしまった。

「「「あれっ？」」」

三人で驚きの声を上げる。

「何よ？　新人祝いと人気受付嬢の分くらい支払うわよ。せいぜいギルドの売り上げに貢献しなさいよね」

拝啓……緑川先生……この人ツンデレって人種じゃないですかね？

【22】　初めての共同作業！（後書き）

緑　川「共同作業ってエロいな……」
ワカバ「そんな事ばっかり考えてるから赤点取るんだよ……」
緑　川「伊藤ちゃんってばそんなんじゃ異世界めくるめくエロスルート永遠に来ないよ？」
ワカバ「来なくていいです。あ、湯のみの柄は楽◎で調べました」
緑　川「業務連絡来た！　ってか△天の回し者？　でイケメン弟子の容貌はどんなの？」
ワカバ「ご想像にお任せいたします」

【２３】　あえて空気は読みません！

結局マイカップを香優様に買ってもらった。
しかもトウファ&イファ姉妹の分までも。
三人揃って、ありがとうございます、馬車馬（バシャバ）のように働きます。とお礼をして食事に向かった。
馬車馬の馬（バ）は一角獣みたいなもので気品あふれた勤勉な性格の家畜である。

余談だがこの世界のウマと呼ばれる動物は草食系で人は襲わないが畑を荒らしていく魔獣と言って討伐対象の闇の世界の生物である。
大概の日本語動物名は魔獣だ。
魔獣図鑑を見せられて名前を知るとショックだった。
ウサギは白い体毛で赤いお目目で長い耳の無駄にデカイ集団で急襲してくる凶暴な魔獣である、チクショー！　全然可愛くねぇ～っ！

気を取り直して、食事である。
イファさんが香優様に言っていた通り、此処の支払いも香優様は出してくれる気らしい。
格好良く遠慮するなと言われても遠慮しない日本人はいないのだよ、だが一番安いものを頼んだら遠慮した事バレバレなんだよって事で私は３番目に安いコースを頼んでみた。
姉妹は慣れているのがそれぞれ好きな（高い）物を頼んでいた。
皆で美味しい美味しいと言いながら、聞いてみたかったことをツンデレな香優様に聞いてみた。

ＡＫＢではなく、ＡＫＹな私は、あえて（Ａ）空気（Ｋ）読まない（Ｙ）発言をしてみた。
こら、ソコＫＹって懐かしいとか言わない。
「香優様は何時快世お義兄様と結婚するんですか？」
周りの空気が和やか爽やか緑色だったのが、恋愛事情おピンク色に変わった……気がする。
「「！！！」」
姉妹も手を止めて香優様の一挙一動に釘付けである。
「……そんな予定はありませんが？　快世に何か言われたのかしら？」
香優様はひと息ついてからそう答えた。
落ち着いているようだが、やや顔を赤らめている。
何だろう、お養母様情報によると、快世お義兄様は昔彼女に振られたことがあるらしいのだが、満更でもない雰囲気だ。
「私もお付き合いされているのは知っていましたが中々ご結婚までいかないのが不思議でしたわぁ」
トウファがのんびり口調で発言する。
「つ、付き合ってないわっ！」
香優様慌てて否定、だ、と？！

「あれ？　でもよく出かけてらっしゃいますよね？　夜会とか」
イファがお付き合い説を支持。
「お、お互い貴族だから仕方ない事よ、社交辞令よ」
香優様釈明会見。
「……お養母様からプロポーズを断られた事があると聞きましたけど本当ですか？」
私、畳み掛ける。
「え、いつの事です？」
「「ええっ？！」」
逆に問い返された。
あれ？　振った自覚無しってどういうこと……？
「青空お義兄様の方が良いと言われたと、お養母様は報告を受けたようですけど？」
何でも快世お義兄様が結婚しようと言ったらしいが、結婚するなら青空様のほうが良いですわと言われてしまったそうな。
おいたわしや、快世お義兄様。
私は快世お義兄様も青空お義兄様も晴緋お義兄様も、というか三兄弟全員素敵だと思います。
「……え……その様なこと言ったかしら？」

ん～と唸って斜め上を見て考え込む香優様。

「「お、覚えてらっしゃらないの（ん）ですか？」」

「え、ええ……青空様は尊敬はいたしますけど……夫にと求めた事などあったかしら？」

……あれれ～ぇ？（某小学生名探偵風）

神様、この人たちの赤い糸グジャグジャですかね？

私のすること解った気がします。

この二人を結婚させればいいんですね！

雅葉なんとなく頑張ります！

題して……幼馴染だ、結婚だ、だっふんだ作戦です！

うん、何のマンガ読んでたかバレバレな作戦名だな。

～＊～

その頃、天上界の神様達は、地上の様子を観察するときに使用する魔法の大鏡、名を下界鏡（げかいきょう）という、で雅葉達を観察していた。

愛の女神ペクテーヌと雅葉を召喚した張本神（ちょうほんにん）である戦いの神チョジェである。

「おい、何か勝手にやる気出したようじゃぞ、馬鹿（チョジェ）」

「え、馬鹿と書いてチョジェって読むの止めて……」

相変わらず尻に敷かれっぱなし（ＮＯＴ夫婦）のチョジェであった。

「馬鹿（チョジェ）、作戦立てるらしいが、戦神（いくさかみ）の出番じゃないのかぇ？」

「幼馴染だ、結婚だ、だっふんだ作戦……わぁ、その作戦名……猫化とかしそう」

馬鹿の振り仮名の件については早々に諦め、某少年誌連載のマンガを思い浮かべて戦神は苦笑を洩らした。

そして愛の女神はもっとマシな作戦名は思いつかなかったのかとため息をついた。

「チャグ（悪戯の神様）ならやるじゃろうな……」

友人（悪友？）の顔を思い浮かべてつつ、下界の様子を見守っていた。

「作戦も何も無い気もするけど……あ、この機会に例の新婚旅行お願いします？」

愛の女神がくっ付けたペアの新婚旅行で快世と香優の仲も進展させようというのが戦神の戦略である。

「あぁ、そうじゃったな。どれどれ、ピピピッと帝国のギルドへ依頼するよう心理操作してくれるわ」

そしてなんだかんだ言いつつ、手伝ってやっているお優しい愛の女神様なのであった。

【２３】　あえて空気は読みません！（後書き）

神様久しぶりな気がします。
ところでこのペースでいくと第２章は何時終わるんだろう。

【２４】　ＯＷＤ作戦、始動！

私は家に帰ってから出迎えてくれたお養母様（かあさま）に無作法にも立ったままで、事のあらまし、つまり食事中の会話ほぼ全てと私の決意を報告した。
お養母様もキョトンとした顔をされた後は、『幼馴染だ、結婚だ、だっふんだ作戦』に協力すると仰ってくれた。
長いので『ＯＷＤ作戦』と略す。
結婚のＫだと語呂が悪い気がしたから、Ｗはｗｅｄｄｉｎｇの略であるのだが、そちらを採用した。
って作戦名考えるのって楽しいな、何でだろう。
これが中二病って奴か、またの名を厨二病。
うん、緑川ちゃん……私しっかり異世界でＯ・ＴＡ・ＫＵやってるよ！　ってか一人で痛い子だよ。

さて、これで強力な情報屋（少なくとも紅堂家の密偵さんは使い放題）と資金提供者（パトロン）（お金必要か？）を得ることができた。
とりあえず二人ともリビングに向かい、作戦の詳細を決める事にした。
ハイ、正直中身までは考えてないです。
パン銜えて十字路とかでぶつかればいいんじゃね？（ソレ転校生だわ。）
「それにしてもフった事を覚えていないというのが謎ね、そんないい加減な娘ではないのよ？」

「フラれたのは何時頃の話なんですか？」
「そういえばソレは私も知らないわ……ただフラれたとしか聞いてないのよ。後で魔動送信術（メール）でカイゼに聞いておくわ」
「こういう時に電話があればいいですね……」
「デンワ？」
「ニホンには文章も本人の言葉も直接やり取りできる手乗りの電気機器がありました。普及率で言うとほぼ１００％です」
「文章も言葉も手乗りで……便利ねぇ……魔動具に応用できないかしら」
「あ、宮廷魔術師さんに預けてましたし、そのうち出来るかもしれませんね」
「あぁ、あの金属製の小箱ね……それよりも快世よ、快世！」
「作戦内容って実際どういうことを決めればいいんでしょうね……？」
「……誰か花道（ハナミチ）を呼んできて頂戴」
ハイ、ということでお義父様（とうさま）のお名前は花道さんです、やっぱバスケすべきだ、この一家。
ちなみにお養母様は翼（ツバサ）さんでございます、あれ、サッカー？
数分後、執事さんと共に威厳を携えてお義父様到着。
ソファに座り、作戦を知らされると開口一番でため息。

「何を真剣に考えているのかと思ったら……」

お義父様、完全に呆れております。

が、だって快世お義兄様（にいさま）、もう２７歳ですよ！　コウユウ様も２４歳！

この世界、適齢期というか結婚平均年齢２０歳くらいなんです。

二人とも雰囲気既に夫婦の癖に、え～、結婚まだなの？　おっくれってる～ぅ♪　って思われてるんですよ～！

あ、リズムはご自由にどうぞ！

と、熱いパトスでお養母様とシンクロ率１００％でお義父様に語った私でございました。

うん、意味わっかんねぇだろうなー。

そういえばこの国の結婚式ってどんな感じなんだろ。

「話を聞く限り双方単純な誤解をしてるだけと言う気がする……６０（歳）にもなってこういう作戦を考えるのは初めてだな……仕事上での作戦よりも難しいぞ、これは」

「「まぁ、そうでしょうね、得意そうに見えません（し）わ」」

何処までシンクロ率１００％……いや語尾が若干違うので９９％か。

とどのつまりお義父様の推理はこうです。

情報が少なすぎるが、快世お義兄様と香優様が会話した時に恐らく結婚を匂わす事を快世お義兄様が言ったにもかかわらず言葉が足りなかったために、香優様はプロポーズと気付かず通じなかった。

そのとき同時に香優様が思い描く理想の相手とやらを青空お義兄様と答えてしまったのではないか。

だが、二人とも相手を意識しているのか、他の相手と結婚する気も

見せていない。
「要は誤解を解けば直ぐにでもくっ付くんじゃないか？」
「その誤解を解く方法は考え付きましたの？」
「……不自然にならないように……遠まわしはまた誤解を生むだろうから、お互いがいる時に直接確認する……とかか？」
指を交互に組み、顎を支えるようにしてウーン、と唸りながらポツリ。
若干の上目遣いで奥様（と一応私にも）に伺う表情。
緑川さーん、この人萌えるよー、可愛いよー。
大人の男の人可愛いと思ったの初めてですわ、おほほほほ。
「「……」」
双方（私とお養母様のこと）無言。
このシンクロ率だと、お養母様も、何コレ可愛い！　とか思ってるんだろうな。
さて、二人が直接対峙する時（戦わんって）か……仕事中ならほぼ何時でもチャンスはあるから仕事中かな。
いや、二人ともお酒が入ってる飲み会の席のほうがいいかな？
「あ、今度新人歓迎会開いてくださるそうで、ソコならお二人も参加されるかと」
「あら、いいわね、飲み会。その時に雅葉が聞けばいいのよ、衆人環視の中でなら逃げられないわ！」

衆人環視って……うん……聞く側の私も恥ずかしいんですが！

「女は度胸よ！」

アレ、その諺って愛嬌じゃね？　ってか帝国（異世界）にもあるんかい！

「……ちなみに対になる諺は『男は稼ぎ』だ」

そっちは超現実的っすね！

【２４】　ＯＷＤ作戦、始動！（後書き）

チョジェ「ちなみに正確には『男は度胸、女は愛嬌、坊主はお経』だぜ☆」

ペ　ク　「今日はずいぶん真面目じゃな」

チョジェ「たまには真面目にするとギャップ萌えってコレに書いてあったから」

スッと懐からマンガを取り出す。

ペ　ク　「やはり馬鹿（チョジェ）で十分じゃな……」

【25】　ギルドマスターは心配性！

「新婚旅行時の案内人……か……」

朝の郵便物の内、直接ギルドマスター宛てで重厚な体相で皇城から逓送されてきた依頼書を見ながら、そのギルドマスターである快世は管理者室（一般企業で言うところの社長室である）にて、いかにも面倒だという態度で呟いた。
その依頼書に記載されている依頼者は『ブエルノ帝国議会（皇帝承認済）』、即ち国家であった。
自身のギルドがまだ設立浅いながらも私営ギルドとしては既に国内大手である自覚はあるが、さすがに国が依頼者として来た事は今まで一度も無かった。

書面には、外国要人の新婚旅行先に我らが帝国が選ばれた。
その道中の安全のため、数十人体制の護衛（ＳＰ）を用意したかったが、当夫妻及びディリトア国側が大仰な護衛は望まないため、両国の折衷案として街中を案内する者として数人を付けることとなった。
案内役を選定するにあたり、帝国内の歴史等一般教養及びギルド情勢に詳しく、帝都に拠点を置くギルドの中から公正なる議員投票で選ばれた。
しかも、依頼は冒険者や護衛を専門にする傭兵等に回すのではなく、自分と副ギルドマスターの香優が当たれ（決定事項かよ！）と書かれていた。
幼少時より冒険者には憧れていたが、まさかこんな形で自分が依頼

を受ける側になるとは……、と快世は独り語ちる。

基本的に要人警護は本来であれば軍部の職務である。
軍部の中でも選抜された近衛団が警護に付くので、自国で言えば現近衛団長である実兄アソラが誰を配置しようか頭を悩ませつつ担当すべき事案である。
なぜ、大仰な警備が嫌だからと言って私営ギルドに依頼する経緯に至ったのかを本当に知りたい。
本当に要人なのか、と。
確かに香優なら並の選抜されたはずの女性近衛兵より強い。
……敢えて自分のレベルは考えないが、彼女は無駄に強い、強すぎて昔……いや、何でもない。

「ってかホイホイと新婚旅行に行くような年齢で結婚したお偉方ってどんなだよ……」

そんな歳若い独身のエリートがいただろうかとディリトア王国の要人、比較的若かったはずの宰相補佐のヴァレリー……名字なんだっけ？
あ、でも国が違った、あの方はユザド国の宰相補佐だった……。
と気を取り直してディリトアの貴族院（議員）の若造やらの容貌を思い浮かべては頭を捻る。
考えても思いつく人材がいなかったため、依頼書の二枚目をめくる。
そこには夫の職業、宮廷魔術師、氏名はイシュライラ・キールンと記されていた。

「うん……宮廷魔術師ね……二つ名『眠れる獅子』、『愛女神ペクテーヌの寵児』、『蒼清（そうせい）の魔導士』、『魔動術崇拝者（まじゅつオタク）』……二つ名以下略。うん、ディリトアの天才宮廷魔術師サマか……」

そういえばあっちにはそんな凄いのがいたなと遠い目をして依頼書を机に置いた。
ディリトア王国の魔術師ネタは雅葉と他国について勉強した時以来である。

あの国の宮廷魔術師の身分は他国のソレよりも高い。
貴族院議員と同じかそれ以上の身分で、王城内に居住すると生活費は国家持ちとか。
素行に問題がなければ希望すればすぐ貴族になれるとか。
ぶっちゃけ裁判沙汰の犯罪をやらかしても本人の研究内容によっては恩赦となり無罪放免とか。
最近は宮廷魔術師自らが講師となる、魔術師育成機関なんて物を作ろうとしているらしい。
噂も混じってはいるが本当に彼らは特殊だ。
あくまで皇家お抱え魔術師である帝国の宮廷魔術師（生活費は自腹）とは魔術師に対する国家制度自体が異なる。

三枚目に当の魔術師様からの注意事項が書かれていた。
『妻は現在ディリトア語しか話せませんが、貴字・民字は多少理解できます。
彼女はあまり男性が得意ではないので、護衛として使えるのは女性の2人組でも良いです。』
いや、男性が苦手って何で結婚した（出来た）んだよ、君達、どうやったのか心底教えて欲しいよ。
と魔術師様の牽制を正しく捉えられずに書面に裏拳突込みを入れそうな雰囲気の恋愛偏差値が低い快世氏であった。
顔と商才の偏差値は高いんだけどな！

「……用心のために案内中は帝国語での会話は禁止しとくか。変に帝国語での会話しようもんなら、この国は……滅ぶ？」

ランク付けで言えば壱級を凌ぐ特級ランクで処理されるであろう依頼書をを眺めながら、最近出来た異世界から来たという義妹（いもうと）の心配をした。

「……雅葉が人体実験されないようにしないと……」

いや、新婚旅行に来て人体実験はせんだろうよ……多分。

だんだん独り言が駄々漏れて情けない感じになってきた。

同じく指名を受けた香優に話しに行かなくてはならない。

ふぅと深く息をつき、快世は重い腰を上げた。

【25】　ギルドマスターは心配性！（後書き）

議員１「公正な投票作業だった……よな？」
議員２「５つもギルド候補あったのにハレルヤにしか票入ってなかったけど……な？」
議員３「０対２８３だったけど……公正だよな？」
（どうやら貴族議員・平民議員全員がハレルヤに清き一票を投じたようです。）

チョジェ「これぞ、オレの真骨頂！　秘儀『意識操作』！」
ペ　ク　「……（やりすぎじゃろう）」

最初副題を『お義兄ちゃんは心配性！』にしたかったけど、終始ギルドを心配してウジウジしてたんでギルマスに。

カイゼ「ウジウジ……」
ワカバ「そして主人公久々の出番無しでっす！」
カイゼ「ワカバは元気だなぁ……」

【２６】　三人寄れば文殊の知恵！

ハレルヤには副ギルドマスター（副マス）が二人いる。
まだ名が出てきていない方をハヤサカ　タクミといい、彼は貴族階級の人間ではなくて平民である。
若かりし頃の貴族のお坊ちゃま快世君（２０）がギルド経営するにあたって、太刀花家のコネにより即戦力として他ギルドから引き抜いてきた開設当初からの副マスターである。
彼は仕事も出来るのだが、ギルマス（カイゼ）とは正反対の積極性でハレルヤ開設当初からの人気受付嬢とさくっと結婚して早々に子を儲け、育児好き男子（イクメン）としてギルド内外から信頼と人気も厚い人物であった。
が、もう一人の副マス、貴族令嬢であり女性として華もある香優の存在もあり、大して表に出る出番は無かったりする。
そんなことタクミ本人は気にもせずに可愛い我が子の面倒を見てから普段は出勤してくるため、主に夜勤担当をしている。
本日は管理者室にて、そんな彼も加わっての経営の上層部三人全員でとある依頼書をガン見していた。

帝国暦１０１１年７月１２２日　午前９時

「……新婚旅行の案内人？」

不思議そうにタクミが呟く。
新婚旅行という単語の意味を解する事は出来るが、帝国には新婚旅行をする文化がそもそも無い。
元々、新婚旅行自体がディリトア王国の文化なのだが、元戦敵であるためか王国文化の輸入は今でも盛んではなく、ちらほらと新婚旅行に行く事は増えてはいるのだが、実際に行くのは主に諸外国から移住してきた若いカップルなどらしい。
約１７０年前の敗戦に対して未だやったら根深いトラウマがあるのだな、と歴史と文化を快世から習った同じく敗戦国出身である日本人として雅葉は思ったりしていた。

人様の物真似の方が一から創るより楽だからなのか他国の技術のおかげで敗戦後の日本復興は超早かった。
確かに日本国憲法だって物まねだとか押し付けだとか言って改正を迫る政治家や活動家がいるから、彼らが帝国に来れば戦勝国の復興援助を断った帝国について感心するんだろう。

帝国はオリジナリティという言葉に弱いらしい。
戦力の違いを見せ付けられた事もあって被害自体は大した事無かったらしいけど、調子に乗って戦争吹っかけた国家上層部の責任とが重いため、自力で復興させますと言ったとな。

日本と背景違うから何とも言えんのだが、そもそもの教育の仕方が間違ってるんじゃないのだろうか？
戦神を信仰する神官が子供に読み書きそろばんを教えるっていうし。
教育と宗教は早々に分離したほうがいいと思うぞ。
お上（カミ）のために神風特攻隊行きマース！　とか聖戦（ジハード）に行くのは怖くねぇ！　とかそのうち出て来たりしないよね？
とは今回の話にはあまりにも余談な雅葉の危惧する帝国の将来の一つでもある。

「私と香優が担当になれって国家直々の依頼書が来たんだよ。案内人は表向きでメインはこの夫妻の護衛だ」

依頼書に記載された表向きの事情と裏事情を快世が説明する。
恐らく王国一の魔術師だから、食事中や睡眠時でも護身結界を常に張っているだろう。
しかし、万が一と言う言葉もある。
旅行期間は二週間、つまり２４日間。
その間ずっと案内人として世話をしろと記載があり、労働基準法を完全に違反している。
（まぁ余談過ぎるが、帝国に労基法は無い上に、彼ら自身は労働者じゃなく雇用する側だったりする。）

「その日は雅葉の歓迎会じゃないの……ちょっと延期しといたほうがいいわね」

おとなしそうな見た目とは裏腹に夕食時にイキナリ爆弾発言してきた新人の所為で、あまり快世を意識したくない香優は依頼書中の公正な投票という文字を眺めて本当に公正な投票だったのかしらと考えつつも、爆弾発言娘の歓迎会延期を提案した。
奴当たりもモチロン若干入っている。
誰も気付かないが。

「あ、そうだった。幹事は誰だった？　ワンか？」

自室で一人悶々としていた所為なのか気付かなかったが、ちょうど可愛い義妹の歓迎会の日程に被っていた。
夜間の不測自体もあるかもしれないから中止はともかく、延期は妥当だろう。

「キムラ姉妹よ」

平静な顔つきで、あぁ、でも二週間二人と言うか四人で過ごすのね……嫌だわ、恥ずかしい、と香優は考えている。
なぜか快世の前ではポーカーフェイスが得意技だったりする香優お嬢様。

「じゃぁ俺が1階行って伝えてくる」

「頼む」

「ちょっと！」

一応二人の微妙な関係を知りつつ、これを機会にと気を利かせたタクミが出て行こうとするのを、詳細が決まってから伝えなさいと香優は引き留めた。
二人きりとか無理だわ、今日は無駄に気苦労が多い。
これも雅葉と、付き合っていると思っていたと発言したキムラ姉妹の所為である。
大体付き合って無いわ、告白されてなんか無いもの。
いや、されたらしいけど覚えてないし、今更聞けないもの。
いやいや、両親はお互い結婚させる目的で幼い頃から交流させてるけど、お互い末っ子の所為か強制的に結婚する必要性も無く、長い間放って置かれた結果がコレだ。

とりあえず怪我や事件に巻き込まれない無いように護衛すれば良いんでしょ？　無問題（モウマンタイ）？
そんな自身の動揺を一切顔に出すことなく、快世と二人きりでなければ仕事にも支障の出なかった香優だった。

恐らく二人きりでも平気な気もするが。

【２６】　三人寄れば文殊の知恵！（後書き）

タイトル有名な諺だけど別に悩んでるわけじゃない……。
男２人と女１人の漢字って　嬲　しか思いつかんかった。
ググると新人を嬲るという例で出てきます。
ぐーぐるさん良い仕事しやがって。

舞台裏にて。
フ　ミ「出番待ち！」
イシュ「緊張するな～」
ワカバ「え、もう出てきたっ！」
フライングです、お二人さん。

【27】　要人警護は是非ハレルヤへ！

午前１０時、雅葉達事務員が和気藹々と仕事をしている。
そこにギルドマスター（カイゼ）と副マスター（コウユウとタクミ）２名の上層部全員が揃って事務室へ入室してきた。
揃いも揃って系統の異なる美男美女で圧巻である。

快世が事務員を集めて重要任務を受けた事を語り始めた。
要人も要人のため、国からの直接依頼を受ける事になったとも説明する。

「快世様と香優様が要人警護もとい観光案内……まぁ妥当ですね」

うんうんと納得したと言う感じでワンが呟く。
はて、本人は謙遜するが快世が強いことは第三者の意見で分かっているから護衛にはぴったりだが、香優もこの分だと強いようだ。

「香優様も何か武術を嗜んでらっしゃるんですか？」

雅葉が興味本位で尋ねた。

「えぇ、バリツを少々。そういうことで歓迎会はちょっと延期させてもらったわ。キムラ姉妹にはもう伝えたから」

香優はあぁ知らなかったのねという感じで答える。

歓迎会の延期よりも地球で聞いたことのある単語に雅葉は少々驚いた。

「バリツですか……（シャーロック・ホームズ！？）」

まさかこんなところで某イギリス人作家の大人気名探偵が使用したとされる良く分からん得体の知れない幻の武術（baristbuzyutu）、武術の誤記説とも囁かれる、に出会えるとは思わなかった。
後で太刀花家でバリツとはどんなものか聞いたところ、合気道、柔道及び空手を混ぜたような武術とのこと。
シャーロック君ってば、（作者と読者の都合で）連載再開したけど……その前に帝国に異世界トリップしちゃったのか？

それで要人についてどんな夫妻なのかをタクミが説明し始めた。
夫はディリトア王国の宮廷魔術師で、妻は専業主婦らしいという。
軍を出す話も出たが断られたとの経緯からどうやらかなり力のある魔術師らしいと思いきや、若干１７歳だという。
名前はイシュライラ・キールン、ディリトアで一番強い魔動力の持ち主との事。
そして妻、フミ・キールン、２７歳……奥さん年上だぁ……。

そして私の初出勤日が休日だった女性事務員のメイサさんがなぜかその点（専業主婦）に喰い付いた。
メイサさんは黒髪のロングウェーブで黒瞳、小動物のような可愛い顔をしている。
日本人と言うよりは東南アジアよりの顔立ちだ。

「いいですね～、宮廷魔術師と結婚したら働かなくていいし～」

基本、どこの国も平民は夫婦共働きらしい。

貴族の愛人になったり、ちょっと裕福な商家の男性と結婚すると家にいたりもするらしいが。
そうするとプチ優雅な奥様方のお茶会とかが待っている。
うん、めんどくさ……。

そこで（宮廷）魔術師である。
魔術師が人気の理由として第一に、魔術師は派閥やお付き合い・馴れ合いを好まない人種なので、本人達が集まる事も少なく、その奥様方の優雅なお茶会が開催されるということが基本的に無い。
つまり、結婚当初にマナーや作法を知らなくても気苦労が少ない。
第二に、魔術師の収入は主に冒険者としての報酬・各種魔法による特許料・魔動具（マジックアイテム）販売等である。
特に才能ある魔術師と結婚するとそれ以降働かずとも特許料だけで食っていけるのである。
以上、魔術師は金を産む木であり、しがらみも少なく、平民娘の玉の輿として憧れの相手であるとのこと……異世界人にもぴったりのお相手だな。

ただし、あまり出逢えないのが難点らしく、宮廷魔術師は城で暮らしているのであちらから来ない限り、平民娘に出逢うチャンスは来ない。
しかも基本スペックがひきこもりなのでますますチャンスが遠のく。
城下等で魔動具販売をしている魔術師は新規開店時に行かないといつの間にか結婚している。
開店から4、5年経過して結婚していないのは性格等に難ありとのことらしい。

「妻としてもそれなりの魔力が求められるから元同僚とかなんじゃないのか？」

ケントさんが子供を産む場合の事を想定しての発言をする。
子供を産みたい場合、夫婦の魔動力差が少ないほうが良いそうで、力差が離れていると流産や早産、若しくは妊娠できない事態になるそうだ。
そのため、特に宮廷魔術師は親か上司の見つけてきた見合いか職場結婚が圧倒的多数らしい。

「そうすると二人分の特許料が入ってきて家で金銭管理してるのかも……魔術師ってデカイ家に住むの好きだけど使用人置くの嫌ったりするから。……独占欲強くて。ディリトアに長者番付があれば、上位は魔術師の名前で埋まるらしい」

寡黙なハズのジローさんが一気に喋った。
魔術師ネタが好きなのか？
それよりも入る金が多いと家計簿管理も大変そうだ。

「あ、そっか～、大変そう～。少しでも間違えると怒りそう～。でもやっぱり魔術師と結婚イイな～」

ということで事務員メンバー見事脱線。
宮廷魔術師の妻も大変なのよ、講座（？）が始まったのである。
ってか長者番付あるんかい、帝国は。

「よし、じゃぁ魔術師と結婚する秘訣を快世と香優がこっそり奥様に聞くと言う事でいいな」

「「「賛成！」」」

タクミ様、変に纏めるの巧いな。

「え、ちょっとタクミ？」

何故勝手にそんな結論出したと柳眉を顰めて慌てる香優様。

「そんなもん聞ける余裕があるか～？」

ハハッと愉快そうに笑ってマスターが事務員にマスター不在による注意事項を述べた。

要は昼間はマスター及び副マスター不在になるため、決裁は夜間のタクミ様が代行するとの事。

それとその間雅葉は必要以上に事務室から出ないこと……だって。

魔術師見たいのに……うん、人体実験されたくないし、仕方ないか。

【27】　要人警護は是非ハレルヤへ！（後書き）

舞台裏

イシュ「出番まだかなー？」
ワカバ「わぁ……また来た……」
フ　ミ「さすが貴字文化の帝国ね。あっちで『愛女神命』ってTシャツ着たすっげー美人がいた」
ワカバ「帝国は戦女神信仰者が多いんですけどね？」
フ　ミ「ってかその人が清楚系美人すぎて似合ってんだか似合ってないんだかどうでもよくなった」
イシュ「？？？」

たぶんソレ、チョジェです。

【28】　さりげなく暗躍中！

雅葉が入社する前、香優達は雅葉の身分を快世の実母である紅堂（クドウ）翼（ツバサ）の養女、つまりは貴族と聞いていた。
とある理由で元々は平民出身であるから貴族の娘にしては言動や考え方が多少違うのであまり深く詮索しないで欲しいとも聞いていた。

ギルドマスター室で3人は件の依頼について話し合っていた。
だが、香優は事務室でのカイゼの一言が気になっていた。
室外からむやみに出ないようにという快世の一言に雅葉も逆らうことなく素直に頷くという軽いやり取りで終わったため、特に他のメンバーは気にも留めていなかったようだが香優は違った。
ソレは、義兄としての心配と言うよりは、強大で有能な異国の魔術師が義妹（ワカバ）を見れば関心を持つだろうという意味が含まれていると理解できた。

「それで何故、あなたの義妹（いもうと）は必要以上に部屋から出ないこと、なのかしら？」

「ん～？」

間延びした返事で快世が書類から顔を上げて、香優の顔を見た。

「おぉ、確かに。何でだ？」

どうやらタクミも気になっていたか、言われて気付いたのか、事務

室での雅葉に対する快世の一言に気付いたらしい。
話すと長くなるんだがと切り出され、話した内容は攫われたりしたら母が暴れるからという何とも言いがたい一言。
溺愛しているのは解った、が、まさか指名手配犯を匿っている訳でもないのだろうに、深く詮索しないで欲しいなら必要最低限の情報は出して欲しいものである。
「いくらなんでも攫われるなんて」
諦めたようにため息をつき、快世はポツリと雅葉の秘密の話し始めた。
「特殊なんだよ、雅葉は。魔動力が無くて魔法が使えないから」
香優は、恐らくタクミも、一瞬耳を疑った。
「……ソレは特殊だな」
魔法が使えない人間なんて聞いた事もなかった。
計算間違いは無いのに、書類上でごくたまに変なつづりで単語を書いてくる彼女を香優は元々平民だったのだし、単に国語が苦手なだけだと思っている。
それでは魔法が使えないならばどうやって文書中の書き損じを消しているのだろうか？
「ソレが紅堂様が保護した理由？」
「そうだ。魔動力が無い生命体なんて聞いた事が無いからな」

「それで？　何故『無い』の？」

「さぁ？　研究中だ。　ウチのはモチロン、宮廷魔術師にも依頼しているが……」

肝心な異世界から来たからという情報は話さず、快世は（宮廷）魔術師の研究結果が思わしく捗らない事まで話しておいてやった。

頼むからこれ以上検索してくれるな。

とある理由から、何時でも頼りなさげに優しげに見えるよう話す快世だが、内心では、お前の問いかけにはポロポロ喋る自信がある！

と些か情けない心境であった。

「それで……書き損じはどうやって消しているの？」

「あぁ、魔術師に魔動具を開発してもらってな。ソレで消してるはずだぞ」

どうやら魔動力が無いことで思うものがあったらしい。

原因不明の魔動力の欠如、とある理由の中の情報としてはかなりの大事（おおごと）に、コレで納得したはずだと快世は安堵した。

～＊～

同時刻、事務室にて。

上司が不在なことをいいことに、ＯＷＤ（幼馴染だ、結婚だ、だっ

ふんだ）作戦のための会議が行われていた。
事務員に作戦の中身を話す雅葉は見事に会議を取り仕切っていた。
伊達にトリップ前に学級委員長をやっていたわけではない、そんなネタ全く出ていなかったが話す機会が無かっただけである。
決して後付け設定では無い、……無いったら無いんだからねっ！

「ということでさっさと結婚させたい訳ですが、何か意見のある方、挙手を」

ハイと言う明瞭な声とともに、スッと右手が挙がった。

「ワンさん、どうぞ」

「魔術師と結婚するには？　という質問をひたすら夫側に投げかけていくのは少々危険かと。妻の前職が明らかになってからの作戦変更も考慮しておきたいところです」

「じゃぁ～コ香優様には最初、妻に前職が何か聞くで～。平民だったら夫側にドンドン切り込んでいく～？　妻も魔術師だったら素敵な魔術師との出逢い方教えて欲しいって正直に聞くのが一番、メイサちゃんのためにも頑張って聞いてきて欲しいとか言えば香優様無碍にしないと思いますぅ」

トウファが閃いたというように両手の平を合わせて間延びした声で話し始める。

「っていうか私が話しかけたぁい♪」

ソレを聞いていたメイサがにっこりと笑って、新婚旅行中の夫にちょっかいを掛けたいと堂々と宣言した。

「いや、無理っしょ」

ソレを雅葉が即座に否定する。
メイサは新婚旅行が何たるかをいまいち理解し切れていない帝国人だった。
案内人以外が二人の世界に入っていけるはずも無いし、案内人ですら入っていける雰囲気になれるかどうか怪しいものである。

作戦の中身としては単純で一度求婚したことがあるらしい快世から、もう一度香優に告白もとい求婚するように仕向けるというものである。
異国の魔術師の新婚旅行とメイサの魔術師と結婚したいと言う一言を切っ掛けとして、快世と香優にやたら結婚と言う単語を意識させることにしたのである。
魔術師と結婚するにはという問い掛けを香優にさせることで快世に、自分から離れていくのではないかという危機感を持たせるように仕向ける作戦だ。
これが失敗しても次は香優から言うように攻めれば良い訳で気楽に行こうと雅葉は作戦の賛同者達に言う。
どーせ好き合ってるようだし、どっちから告白してもいいじゃないか、最終的には痺れを切らした両親族作戦が待っている。
だったら最初から親族会議で結婚させろやと思うが、猫可愛がりの末っ子達には好き合っていても無理強いはしたくないと言う。
なんて我侭、いや放任主義な……と雅葉は思ったり、思わなかったり、いや思ったけど口には出さなかった。
手元に置いておきたいのもあるけど、可愛い孫も見たいのよって我侭と言わないのならばなんと言おうか。

そんなこんなで魔術師夫妻の新婚旅行まであと1日。

雅葉達が不穏な企みを実行しようとしている事を上層部3名は全く知らない。

【２８】　さりげなく暗躍中！（後書き）

書き損じは予めお抱え魔術師に魔法をかけてもらった日本から一緒に持ってきた消しゴムで消しています。
消したい部分を軽く擦る事で魔法が掛かるので消し屑は大して出ません。

【２９】　思ひ出ぽろぽろ、目に沁みる！（前書き）

快世氏がもやもやしてます。

【29】　思ひ出ぽろぽろ、目に沁みる！

魔獣退治、財宝発掘や新種発見など、将来は冒険者になりたいと思っていた。
小さい頃から家督は兄達の内のどちらかが就くだろうと言う事が分かっていたから比較的自由に過ごしてきた所為でもあるし、友人が絶対冒険者になると息巻いていた所為もある。

その友人は実際冒険者として世界中を駆け回っている。
彼は美食を追い求めるためならば世界の果てまで行く。
というか実際行っている。
しばらく会っていないが元気だろうか？

自身はといえば、幼馴染や兄達の出来が余りにも良すぎて、自分の純粋な武力に未来が無い事がわかってからは冒険者に欠かせないギルドという存在を意識し、ギルドでも経営しようかなと思いついて口に出していたのが運の尽き？
あっという間にギルドマスターまでの道が用意されてしまっていた。
なぜか銀行に勤めている太刀花家最強（凶？）の実力者である長兄晴緋には、融資の書類初めて作ったんだよね、と作らなくてもいい借金を背負わされ、国軍の次期将軍候補の次兄青空には土地確保しといてやったぜ！　と爽やかに書類を手渡された……軍の遊休地、相場より高く買い取ってる事になってんだけど！
という訳で今更やっぱり二流でも三流でもいいので冒険者やりたいですとは言えなかった。
前述の友人とパーティ組んでならそれなりに冒険者としてやってい

けると思ってたのに……。

　そんな訳でハレルヤを設立当初、ただの憧れがきっかけで始めた俺はギルド経営のけの字も知らない阿呆だった。
いや、知識としては開設前に叩き込んだのだが、いかんせん裏事情なんてものは全く知らなかった。
ギルドには派閥があって官僚（民衆）派と貴族派があることや、周りのギルドに挨拶としてうんたらかんたらというようなものだ。
そんなもん知らなかったから対応が後手後手に回り、貴族の坊ちゃまが遊びでギルドを設立しやがってと同業者に嘗められていた。
でも俺は大貴族だからかあからさまな態度に出ない。
だがな、目は口ほどにモノを言ってるんだよ、お前らオレの事嫌いだろ！
でも香優やタクミのおかげでなんとか経営も上手くいって軌道に乗った。
その矢先に売れっ子人気受付嬢といつの間にか結婚することになっていたタクミ。
香優に求婚したのはタクミの婚儀式後の軽い食事会でのことだ。
俺が２３歳、コウユウが２０歳の時。
どうやったらタクミのようにそんなスムーズに人生歩めるんだろうと考えた。
人生のまさしく先輩であるタクミから、思い立ったら吉日というアドバイスを貰った。
だから、このままダラダラ過ごすのも結構好きだけれど、もうちょっと踏み込もうとばかりに声を掛けた。

「香優、ちょっといいか？」

「えぇ、いいわよ。何かしら？」

「ん……なんだ、タクミが結婚しちまったし……俺もお前もいろいろ考えないとと思ってな」

「そうね、考える事が山積みね。新しい受付を雇わないといけないし」

「えっと……受付のことは置いておいてだな……その……俺達も結婚しないか？」

「何を言ってるの、受付は大事よ。女性向けに男性の受付員を配置させましょう」

「えっと……」

「ちょうど青空様みたいな男性が応募してくれそうなのよ……まぁ青空様のほうが何百倍も良い男ですけれど」

「……青空が好きなのか？」

「青空様を嫌いな女性がいるのかしら？」

「……いないと思う」

というように、さっくりと彼女は俺の求婚を無視してくれたわけである。

……傷つく。

でも同僚なのでこれ以上突っ込めない……。

なんでそもそも同僚になったんだっけ……？

あぁ、あなたの事が心配だから私も一緒に手伝うわ、とか言っていた気がする。

貴族のお嬢様ってのは基本的に家に篭ってる。
間違っても彼女や雅葉のようにギルド経営の手伝いとか外で働きたいなどとは言わない。
アレか、彼女のほうが年下だけど、俺は彼女に弟的なものとして見られてるのか？
確かに何かと勝てたためしがないが。
喧嘩はもとい、口喧嘩も然り、菓子の取り合い然り……あ、俺カッコ悪。
いやいや、彼女のバリツの腕前は俺より数段上だ。
彼女の関節技を食らったら俺は抜け出せない……心地よくて抜け出さないわけじゃない！
本気で抜け出せないんだ……。

「新婚夫婦って何ソレ……美味しいの？」

雅葉の故郷ニホンとやらで流行っているという決め台詞をボソリと発音してみた。
美食探求者の友人が好みそうな台詞だ……しかし、俺が言うとただただ空しい、コレ負け組用の台詞か！？
俺も異世界行きたい、サラリーマンとか人生全く違うものに変えちゃいたい。
ジドウシャとやらに轢かれれば行けるのならば、誰か開発してくれ。
雅葉曰く、普通ジドウジャに轢かれたら逝く（死ぬ）らしいのだが……そこは賭けだ。

「明日からか……平穏無事に終わるといいな……」

俺はこれまでの人生と明日からの護衛任務がいくら考えても変わらないことに溜め息をつき、布団を引っ被って寝る事にした。
とりあえず無理矢理だけれども（拒否権無かったけれど）仕事は引

き受けてしまったのだし。

【２９】　思ひ出ぽろぽろ、目に沁みる！（後書き）

快世はヘタレという名の残念なイケメンです……。
そんな兄さんが好きです。

【３０】　魔術師夫妻、来る！

とうとう依頼の対象者達が来る日となった。
事務室で快世と香優が注意事項を淡々と話し、主任であるワンに頼むぞと声を掛けた。
任せてくださいとハキハキと答えるワンとそれに賛同する事務員達。
今日も今日とてハレルヤは平和である。

「それにしても新婚旅行日和ですね……雲一つ無い青空、でも暑くも無くて、寒くも無い」

私は今日からの天気が良いことが自分が旅行をするかのように何故か無性に嬉しい。
この二週間、天気予報は快晴であるらしい。
気温も２５度前後、湿度も低めで過ごしやすい絶好の旅行日和。

「そうだな……雅葉、ワン達に迷惑をかけるなよ？」

ギルドマスターもとい、快世お義兄様はなんだか随分とシスコンになってしまったらしい。
ソコまで心配されるほど子供ではないのだが。

「そうね。それじゃぁ、行ってくるわね……行くわよ、快世？」

心配そうな目で雅葉を見つめる快世に香優が痺れを切らした。

「……あぁ、行ってくる」

「「「「「「いってらっしゃーい」」」」」」

「アタシ見に行っちゃお～っと♪　もしかしたら万が一って事もあるだろうし！」

そう、こんな風に、メイサのように、玉の輿になろうとなんて思っちゃいない。

というか、何がもしかしてで、万が一なのだろうか。

そもそも、そんな万が一な事があれば、妻であるフミさんとやらが黙っちゃいないだろう。

世界最高峰の魔術師の妻である。

それなりの報復を覚悟しなければならないのではないだろうか。

『……人の恋路を邪魔するヤツは馬に蹴られて死んじまえ？』

日本語、ディリトア語でポツリと呟く。

既に結婚しているのだから恋路ではないような気もするが。

恋愛にまつわる慣用句が他に思いつかなかった。

「え？　何？　聞き取れなかった、もう一回言って？」

小さい声だったため聞き取れなかったのだろう。

ディリトア語自体は理解（わか）っているメイサが小首を傾げて聞いてきた。

「えーっと、死にたくなきゃ、変な行動起こすな？」

ニッコリ笑ってはっきりと言ってやる。
魔術師の所為でハレルヤに死体が転がったらばソレからの仕事がし辛い事この上ない。

「えー温厚な美青年って聞いてるもんっ」

メイサが頬を膨らませて文句を言うという可愛い抗議の仕方を見せた。
さっきの傾げ方といい、いちいち仕草が可愛らしい。
ワザとなのか、天然か。
同じ女性である自分には効果が無いのでどうでもいいのだが。

「らしいですね」

知り合いの、もとい、自身の身体を検査してくれている宮廷魔術師からもそう聞いている。
彼女（年齢の近い女性であると最近知った）も滅多に無い機会なので逢えないかとちょっと期待しているらしい。

「いやぁ、でも男は女で変わるし、また逆もありえるからねぇ～」

ケントが腕を後ろで組みながら話に入ってきた。

「そんなに見たいなら、ちょっと受付嬢に用事がある振りして話しかけて直ぐ戻ってくればいいでしょ、変に気を張るほうが危険かもしれないし。そんなに見たいなら止めない。知らない振りしてるわよ、私は責任取らないし、皆も取らない。メイサだけで頑張っといで？」

ワンがメイサだけ見に行く事を強調して提案する。

「ううう、誰かを巻き込もうと思ってたのにぃ……受付に用事があるのでイッテキマース！」

メイサは諦めたのか敵地（？）に一人で挑む覚悟を決めて１階に降りて行った。

「やーしかし、きっと魔術師ってあーゆー子は苦手だろうね～」

ケントが伸びをしてそう呟く。

確かに草食系男子の代表でもある引きこもり大好きな魔術師は奥手そうだから、ギラギラとしている肉食系女子（？）のことが苦手そうだ。

いや、完全なる偏見だけど。

「でも奥手だからこそ魔術師はそういう相手としか結婚できない。自分から好きな相手に想いを伝えるっていうのがまず無い。奥手だから捕食されるばかり……って聞いた」

魔術師ネタ好きのジローさんの補足に、あぁ、逆に？　と、すごい納得した。

まぁ、とりあえずメイサが無事帰ってくる事を祈る。

そういえば今日の受付、誰だっけ？

その魔術師の顔見たさで揉めたんだったっけ？

結局トウファ・イファ姉妹に決まったんだっけ？

「やっぱり凄い素敵だったー！！！」

興奮した面持ちでメイサが1階から2階の事務室まで小走りで駆け込んできた。

「もう、美青年も美青年！　青の長髪で優しそうにおっとり微笑んでて、マスターほどではないけど背も高くて、足も長くて、机上で奥さんの左手と彼の右手を絡めてて……でも奥さんちょっと恥ずかしそうに顔赤らめてて……左手を膝元に持っていくんだけど、彼がその右手を彼女の腰元に絡めるわけですよ！　離れたくないの！！！　いいなぁ～～～！　羨ましい～～～！」

1階に降りてから5分も経っていない頃であろうか。
変に思われないように受付嬢に話しかけるという作業までこなしているはずだから、直ぐ戻ってきた割に凄い観察力である。
お前はメガネのガキんちょ探偵なのか。
というかこの弾丸トークを聞く限り、魔術師さん草食系じゃないみたいだなぁ。

「……うむ、ご苦労。仕事に戻っていいぞ」

興奮冷めやらぬメイサさんをワンさんは両肩をつかみ、無理やり椅子に座らせた。
いつもの通り、経理とその他の事務仕事を再開させようとした。

「奥さん年上って書いてあったけど見えなかったよー、全然10代でも通る！　むしろ私よりも若いんじゃないかって思ったね。あ、雅葉とかアタシと同じで黒髪で黒瞳だったよ。可愛い系だったけど、ディリトア人では珍しく小さかった！　160cm無いね。　でもきっとあの人も魔術師なんだろうね、若い旦那に併せて若返りの魔法使ってる的な。私もあと10年後には使いた～い」

つらつらと観察してきた事を他の事務員達に向かってなのか、それとも大きい独り言なのか、メイサさんはよく喋った。
ただ、１０年後でもメイサさんは恐らく３０手前、しかも東南アジア系の童顔だ。
まだまだ若返りの魔法なんて不要だと思う。
というかメイサさん達実際いくつなんだろう？
今度の歓迎会で聞こう。
というか可愛くなくて悪かったね、美人とか綺麗とかはよく言われるんだぞ。
可愛いとか言われてみたい……。

「そういえばディリトア語でデンシャって何かな？　誰か知ってる？　それだけちょっと大きい声でマスターが言ってたんだけど？」

なんですと？

「デンシャ？　聞いた事ないな？　イシュライラ氏の新しい魔動具じゃないのか？　で、ギルド向け商品とか？」

ジローさんがデンシャとはギルド向けの新しい魔動具ではないかと示唆する。
そうだよね、デンシャって名前のアイテムだよねぇ……まさか電車じゃないわな。
そんなやりとりをしている間、イキナリ事務室のドアが開かれた。

「雅葉、下に降りてきてくれ！」

危ないだろうから近づくなと釘を挿した張本人であるはずのギルドマスターが私を呼んだ。

「はい？」

間抜けな返事で返してしまった。

【３０】　魔術師夫妻、来る！（後書き）

ついにバカップル登場……でもまだ雅葉は２階、夫妻は１階。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2416r/

ギルド『ハレルヤ』の経理係

2011年6月27日09時58分発行